
第 1 8 期
日 本 イ ン ド 学 生 会 議
活 動 報 告 書

2 0 1 4

THE 18th JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE
OFFICIAL BULLETIN



2014 年度

第 18 期 日本インド学生会議

活動報告書

開催地：東京

開催期間：10 月 3 日～15 日



上：着物の着付け体験にて

下：インド大使館にて





上：開会式にて

下：閉会式にて



-目次-

実行委員長挨拶-----	5
お世話になった方々からのお言葉-----	6
参加者名簿-----	15
第一部 日本インド学生会議とは	
基本理念-----	18
概要-----	19
沿革-----	20
第二部 活動報告	
年間活動報告-----	34
各局活動報告および反省-----	35
第三部 本会議報告	
実施要項-----	40
本会議日録-----	44
分科会レポート-----	58
フィールドワーク報告-----	85
文化交流プログラム報告-----	89
参加証-----	92
特別コラム-----	93
写真集-----	99
第四部 個人語録	
実行委員個人エッセイ-----	115
インド学生からのメッセージ-----	129
第五部 おわりに	
謝辞-----	143
規約-----	145
編集後記-----	150

《実行委員長挨拶》

第 18 期日本インド学生会議実行委員長 町田日奈子

今回の第 18 回目の本会議では、
東京あきる野市のロッジでの共同生活のなかで、
それぞれが役割を意識し、仲を深めることから始まり、
長時間の電車移動のなかで、ひとりひとりとのコミュニケーションを取り、
高校訪問、幼稚園訪問、フィールドワーク、ホームステイ、観光……
とたくさんの機会を共に体感することで、それぞれ一言では表せないくらいの学びと出会いを得ることが出来ました。

先輩方が多くのつながりと歴史を作ってくれたからこそ、
周りの方々がたくさんの機会をくださったからこそ、
インド人学生がどんどん話しかけてきてくれて盛り上げてきてくれたからこそ、
日本側メンバーがインド側メンバーのために常に考え行動してくれたからこそ、
とても素晴らしい時間を過ごすことができたのです。
皆さま、誠にありがとうございます。厚く感謝申し上げます。

私達は、彼女のつくってくれたチャイの味も、彼がロズさんだ歌も、議論のなかで放った言葉も、いつも欠かさず電車のなかで席を譲ってくれた優しさも忘れないでしょう。
日本とインドで異なる点は多いですが、同じ学生同士で様々な機会やひととの出会いを共に体験することの大切さを、噛み締めることができました。

私たちの人生の予定に、
「彼・彼女たちに会いに行く/迎え入れる」という
いつになるかわからないけれど、必ず決行されるであろう予定が加わりました。それが、なにより嬉しく、この団体の真髄なのだと思います。

18 期日本インド学生会議 実行委員長
町田 日奈子

《お世話になった方々からのお言葉》

AMBASSADOR OF INDIA

भारत का राजदूत



Message

I am very happy to learn that the 18th Indo-Japan Student Conference was successfully organised in Japan from 4-14 October, 2014 and that the organizers of the Conference are publishing a report on the activities undertaken jointly by the students from India and Japan focused on education, welfare and environment issues.

It was my pleasure to welcome and have a wide-ranging interaction with the students during their visit to the Indian Embassy on 14 October. Student exchanges can play a key role in strengthening the bonds between our two nations. JISC has contributed significantly in promoting mutual understanding and friendship between Indian and Japanese students over the years and I am very grateful for the efforts of both the organisers and the students.

I extend my best wishes to JISC for their future activities.

Tokyo
30 October 2014

Deepa Gopalan Wadhwa
Ambassador of India to Japan

2014 年度日本インド学生会議の成功に寄せて

日本インド学生会議（JISC）が、去る 10 月 4 日から 14 日まで、インド各地からの学生 12 名を迎えて本会議を成功裏に終えたことに対し、心からお祝い申し上げます。

生活文化交流、スポーツ交流、高校や幼稚園の訪問、ホームステイ、観光など多彩な交流は、インド人学生に日本の良さを強く印象付け、両国の相互理解に寄与したものと信じます。

貴会議は、有力大学の優秀な学生の皆様が寄り合って組織づくりを行い、1 年間を通じて、日印間の学生の交流と相互理解のために準備活動、本会議開催、報告書編集・報告会開催、社会還元活動と切れ目なく活動されています。まことに有意義な学生活動であるのみならず、社会貢献として賞賛に値するものでございます。

日印関係は、政治安全保障、経済・経済協力、文化・学術交流など各分野で拡大深化しつつありますが、青年交流や留学生交換の面では大きく遅れております。両国政府や我々民間団体にはこれらを促進する義務がありますが、自発的にイニシャティブを取られる皆様の役割は極めて重要です。皆様のご活動がカタリシスになり、日印両国においてこれに倣う動きが触発されることを願っております。

また、このような素晴らしい活動が皆様方の能力を高め視野を広げ、将来各方面で御活躍なさる上で大きな資産になることを確信しております。

日印協会は 111 年にわたり日印関係の増進に微力を尽くして参りましたが、学生交流の面でも皆様とともに歩み励まし合いながら、これを発展させていきたいと考えております。

第十八回期の日印学生会議大成功で終了おめでとうございます。

今回コルカタからは八名送ることが出来、そのうち四名は去年の経験者だったので出発前の準備はスムーズに出来たようです。帰ってきた学生たちの顔は満足さと嬉しさに輝いていました。いろいろな話を聞いてその中のいくつかのポイントを書いてみます。

- * 次回は是非自分のお金で日本に行きたい。
- * 13日間の間に何年間分もの経験をした。
- * 次回の会議に参加してお世話になったお返しをしたい。
- * アニメが好きで日本に興味をもったが日本でそのアニメの本を手に入れ、又コスプレを見てとても感動した。
- * ホストファミリーの人は第一期の会議のメンバーでお家でニガム先生の写真を見た。

日本側は六人でインド側十二人のお世話をするのは本当に大変だっただろう想像しています。いつもながら長浜先生にはいろいろご心配を頂き有難うございます。学生のビザの申請にあたり委員長とお母さまには大変お世話になり有難うございました。

皆さん、来年はどうぞインドに来て新しく変わっていく古い国、インドを見て下さい。お待ちしております。

ABK AOTS DOSOKAI Chairman Mr. M. R. Ranganathan

At the outset, myself, and other members of ABK AOTS DOSOKAI want to thank you and JISC for your continued cooperation with us for the successful implementation of JISC Programme. This the second time student from Chennai could make a trip to Japan and Interact with JISC student Community.

With the current changing Global equation when two of the Asian Countries Japan and India have become closer in areas of Industry, Economy and a good growth of Japanese learners, the JISC's cooperative Role is very vital to grow the future Industry and Economy leaders with Passion and love for each other's country and their People.

The returned Students very happy that they could meet you all Understand the cultural and social life through living with the families and interacting with you all.

Thank you very much and request your cooperation in the years to come also.

Rabinder N. Malik, Ph.D.
Visiting Lecturer, Keio University
Former Executive Officer, United Nations University

It gives me great pleasure to send my warmest greetings on the successful completion of the 18th Japan-India Students' Conference. I would like to congratulate the Japanese students who organized this year's program that included conference and meetings, cultural exchanges, visits to Japanese companies and NGOs, home stays and sightseeing. I have no doubt that it has been a rewarding experience for the Indian students who joined this year's conference and visited Japan.

As a long-term Indian resident of Japan, I am personally very happy to be associated with the Japan-India Students' Conference, which brings together students from Japan and India on an annual basis, either in India or Japan. It provides the students from both countries an excellent opportunity to get acquainted with the culture and traditions of each other's country and it improves their intercultural competence.

As young people of today are the leaders of tomorrow, such interaction between the students of Japan and India has long-term benefits and contributes greatly to promoting friendship and cooperation between the peoples of our two countries.

I am glad that this year the Discover India Club (DIC) was also associated with this excellent program.

I wish continued success for the Japan India Students' Conference.

日本インド学生会議も 18 回目を迎えることとなりました。今回も、学生会議のメンバーたちはすばらしい成果を残してくれました。

日本とインドの関係は今後さらに発展することが期待されており、今回の学生会議で提案されたことは、全ての関係者の間で共有したい内容でなっています。

今回の会議の成功を導いた日本側およびインド側のメンバー全員の努力に感謝するとともに、彼らの今後のますますの発展を祈念しつつ、巻頭の言葉といたします。

「第18期日本インド学生会議」日本開催を支えて下さった皆様に感謝申し上げます。

日本開催につきましては、2年続けてインド開催をして、その後の1年を日本というかたちで18年の歩みを進めてまいりました。今回、6回目を数える日本開催が可能になりましたのも、これまで数多くの方々のご理解・ご協力をいただき続けられたこと、そして毎期の参加学生よりインドと日本の交流の重要性が語り継がれたことの成果と存じております。

日本インド学生会議の活動は、できる限りを学生の手で進めていくことを活動の特徴の一つとして、発足時より大切にしています。今期も、一つ前の17期で次期に活動を繋げるための助成金の申請をしてバトンタッチをしています。18期では、三菱UFJ国際財団・双日国際交流財団よりの助成金、個人やOBOGからの協賛金をいただくことで、この活動を続けることができるようになりました。

日本にとりまして、インドは大切な国。そのような意識を強くする様々な報道がなされつつある昨今ですが、何よりも人と人との心のレベルのあり方が大きな基盤になると考えます。日本インド学生会議では、次の世代を担う学生により、現在から未来を創造するための意見交換をしながら交流し友好を深めることを大切にしています。

寝食を共にしながら、インドからの学生をおもてなしする。限られた滞在期間の中で、何をしたら喜んでいただけるのかを模索し続けた結果、学生と学生の間には感謝や感激の念があふれる、そんな繰り返しの毎日だったようです。時には徹夜をして準備をした、そんな努力の日々もあったと伝え聞いております。

インドよりお迎えした学生の日本滞在は約2週間でしたが、事前準備の期間も含めれば短いとはいえ交流期間を重ねています。また、参加した両国の学生が、これより先、インドに関わり日本に関わりながらの人生を歩むことをイメージしますと、草の根レベルの活動でありながら大木への成長も期待できます。

現在は、ご縁をいただき日印というところからのスタートですが、将来的には世界と向き合う人づくりでもある活動と存じております。

末筆になりましたが、学生のためにお時間を下さったディーパ・ゴパラン・ワドワ駐日大使閣下、着物の着付け体験の機会を下さった大使閣下のご友人でもある北爪裕子様、そしてホームステイのご協力にて日本の家族となってくださった皆様に、心より礼申し上げます。

これからも日本インド学生会議が末永く続けられますよう、よろしく願い申し上げます。

多くの方々からのご理解、ご支援、ご協力を頂き、第18期日本インド学生会議本会議を無事開催することが出来ました。本当にありがとうございました。日本インド学生会議は、3年に1度インドから日本へ学生を招き会議を行っています。これまで、18年6回に渡り、インドの学生を日本に招くことができ、とても嬉しく思っています。

今回の来日したメンバーには、今回の経験が初めての外国への渡航だった方、初めての日本への渡航だった方も多くいました。そんな中会議の日程を組み立て、実行した日本側メンバーは、大変な苦労があったと思います。一緒に有意義な時間を過ごそうと外国の人を日本に招くことは、想像したよりも大変で、想像したよりも気づくことが多かったのではないかと考えています。本当にお疲れさまでした。

さて、今回私自身もインド人学生のホストファミリーを探していると聞いて手を挙げました。私自身5期の時に参加し、インド人ホストファミリーに良くして頂いた経験から少しでも役に立てたらと思って手を挙げました。

いろんな世代の日本人に出会えたらと思い両親の協力を得ながら進めようと思いましたが、食べものはどうしたらよいか、言葉はどうしたらよいかなどなかなか踏ん切れませんでした。いざインドの学生が来て一緒に食事をすると、心配していた顔が笑顔になり、不慣れな英語で日本の印象を聞いたりしはじめました。来てくれたインド人学生も、ゆっくりと英語をつかったり、日本語の単語を駆使しながら、日本に来ての驚きや会議の様子を話してくれました。見慣れない食べものをみて、材料や作り方を聞いては食べ、美味しいと感想をいってくれ、両親にとっても楽しいひとときになりました。インド人学生が帰った後には、頂いたお土産に恐縮し、もっとこうしたらよかったかなと反省したり、寒くなかったかなと心配したり、今度来た時にはまた来てもらいたいねと話していました。

インド人学生の日本、日本文化、日本人への関心、そして、出会った人への気持ちは両親の気持ちをほぐしていったのだと感じました。たった一晚の出来事でしたが、こういった学生会議ならではの出会いの大きさや強さを改めて感じる時でもありました。

たくさんの出来事があったと思います。この報告書を読むことをとても楽しみにしています。どんな出会い、苦しみ、喜びがあったのか、そしてどんな話し合いをし、どんなことを感じたのか、しっかりと伝えてくれることを期待し、読みたいと思います。ぜひ、皆さんもこの報告書をめくっていくのを楽しみにお読みください。そして、ぜひ18期のメンバーにどんな会議だったのかと直接尋ねてください。18期のメンバーも、この経験を大切に味わい、多くの人に伝え、これからの人生や社会生活に活かしていってくれることを期待しています。

《第 18 期日本インド学生会議実行委員者名簿》

【日本側】

- ★町田 日奈子 (実行委員長、総務局長) 早稲田大学 社会科学部 3年
- ★鈴木 盛太 (副実行委員長、財務局長) 日本大学 理工学部 3年
- ★乳原 晶子 (国際渉外局長) 慶應義塾大学 文学部 4年
- ★安福 友里恵 (国内渉外局長) 東京大学 教育学部 3年
- ★井上 咲菜 (広報局長、国内渉外局員) 慶應義塾大学 商学部 4年
- ★今井 明 (学術局長) 中央大学 経済学部 3年

【インド側】

Kolkata Students

Siddhesh Gooptu(President) : Jadavur University

Ayan Mitra(Head of Academics) : Jadavur University

Aaleya Chanda(Communicator) : Culcutta University

Ayantika Saha(Head of Culture) : Culcutta University

Diana Benerjee(Joint Editor) : Sikkim Manipel University

Madhubarna Dhar(Editor) : SSS St.Xaviers University

Rik Bhatta(Head of Event Management) : Goeka college of commerce and business administration

Smaran Basu(Head of Publications) : Southsity college

Chennai Students

Akshaya Narayanan : S.S.S.Jain college

Coimbatore Students

Anitha Jai(President) : Psgr Krishmmal college for women

Nivedha Ashok : PSG Institute of Management

Senthilvel Mandharachalam : PSG Institute of Management

<第一部>

日本インド学生会議とは

《日本インド学生会議 基本理念》

「学生の学生による国際社会の将来のための会議」をモットーとする、私ども日本インド学生会議の主たる目的は以下の通りであります。

- 1、 学生という立場を存分に生かした、既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれない自由かつ建設的な直接討議を通じ、世界の諸問題について新たな意見、解決策を導き出し、自ら実行するとともに、それを社会に報告・提案する。
- 2、 上記のような討議に限らず、日本とインド両国の学生が寝食をともにする本会議の全日程、またそこまでの準備期間を通じて、両国の学生が直接的な交流をすることにより、お互いの社会、文化、価値観、考え方などについて認識・理解をし、それらを社会に発信する。

現在、私たちが生活するこの地球上では、環境問題・内戦・経済摩擦・人権侵害・人種差別など様々な問題が起こっています。そんな中、次世代を担う我々学生は、このような問題に対して真剣に取り組まなくてはならないと考えます。そこで、当団体は「日本とインドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

まず初めに、学生という社会的・営利的・政治的なものから自由な立場の我々は、専門家やビジネスマン、政治家ではすることのできない、より直接的で草の根的な会議をすることが可能であります。当団体はその利点を存分に生かした、政治家や専門家の「縮小版」にならない会議を目指しています。その一方、いくら「草の根」とは言え、私どもと対話するのは、インドの学生という一部の上流階級の若者ではあります。しかし、彼らは確実にインド社会を変えていける存在として、非常に意味があるものだと考えています。

次に、何故インドなのでしょう？インドは複雑に民族・宗教が絡み合う、他に類を見ない多様性に富んだ国であり、同じアジアでも日本とは全く違った文化・社会を持っています。そのようなインドからは新たな道を探ること、新たな価値観を学ぶことができるのです。また、現在、日本とインドはわずかな政治的・経済的関係を除き、文化的・精神的交流つまり人と人との交流は著しく乏しい状況にあり、お互いに誤解、偏見が至る所でみられます。私どもは、一年間の準備期間も含め「会議」というものを通して生身のインド人、インド文化を体験することができます。

そして以上のような成果で自分たちが成長するのはもちろんのこと、これらを社会に報告・提案することによって、国際社会に貢献することが当団体の最終目標であります。私どもは、社会からの助成・支援を受けて活動しているという自分たちの「公的性格」を認識し、社会還元への模索を続けていきます。

《日本インド学生会議 概要》

名称	日本インド学生会議（英語名：Japan-India Student Conference）
設立年月	1996年8月
創設発起人	石津達也、長浜浩子、後藤千枝
顧問	近藤正規
組織構成	実行委員会、OBOG会、創設発起人(3名)、顧問(1名)、賛助会員 (実行委員会…参加資格は大学、大学院、短期大学、専門学校に所属する学生)
協力団体	インド側パートナー、国際協力ユースネットワーク「絆」
団体目的	日本とインドの学生同士の討議や交流を通じて、お互いの社会、文化、価値観などを理解し合うことで、学生という立場での日印友好関係を築く。そして討議結果や交流の体験を社会に発信し、国際社会に貢献する。
活動概要	事前活動…組織運営、勉強会、合宿 本会議…学生同士のディスカッション、ホームステイ、フィールドワーク、文化交流（毎年日本、インドのどちらかで開催する。）事後活動…報告書作成、報告会開催、次期実行委員募集週に1回ほど定期的にミーティングを行う。
発行物	機関誌、活動報告書
広報活動	ホームページ、ブログ、twitter、facebook

日本インド学生会議は1997年のコルカタ大会を第1回目として始まり、2014年で第18回目を迎えます。

2001年にデリー大会が始まり、2009年から始まったチェンナイ大会も現在まで続いています。プネーで開催したこともあり、2012年はバンガロールにも訪れました。このように、開催年によって開催場所や内容は変わります。

運営は実行委員である学生が行っています。OBOG会、創設発起人、顧問からの助言を受け、学生でありながら、日本とインドを結ぶ団体としての意識をもって活動しています。対外活動としては、一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくため、多くの人にインドに関心を持っていただくために、講演会やイベントの開催などを行っております。また、社会と接点を持って活動していくために、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。他の同じような志を持つ学生会議団体とも交流を図り、お互いに切磋琢磨しております。

《沿革（2014年12月現在）》

1996年 8月 日本インド学生会議創設事務所発足
（石津達也、長浜浩子、後藤千枝）

第1期

1996年 10月 第1期日本インド学生会議実行委員会発足
11月 臼田雅之氏（東海大学文学部教授）顧問就任
1997年 3月 カルカッタに第1回先遣隊派遣
8月 第1期日本インド学生会議本会議
（於：カルカッタ 8月2日～9月11日）
11月 第1期本会議報告会開催

第2期

1997年 11月 第2期日本インド学生会議実行委員会発足
1998年 1月 （財）アジアクラブ主催 沖守広氏写真展参加
2月 機関紙第1号発行
3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣
4月 （財）国際教育財団より助成金給付第1回総会開催（各種規約施行）
6月 （財）三菱銀行国際財団より助成金給付機関紙第2号発行
7月 会議前合宿
8月 第2期日本インド学生会議本会議
（於：カルカッタ 8月5日～15日）
9月 （財）吉田茂国際基金より助成金給付
10月 （財）アジアクラブ主催イベント
インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加
第2期本会議報告会開催

第3期

1998年 11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足機関紙第4号発行
12月 「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催
1999年 2月 「同上」討論会第2回開催
3月 機関紙第5号発行

- 4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 6月 カルカッタへ第3回先遣隊派遣
(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
- 8月 福永正明氏 (拓殖大学) 顧問就任機関紙第6号発行
- 9月 本会議直前合宿
- 10月 第3期日本インド学生会議本会議 (於: 東京 10月2日~13日) 機関紙
第8号発行
「ナマステ・インディア」参加
- 12月 第3期本会議報告会開催第3回総会開催

第4期

- 1999年 12月 第4期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2000年 1月 「第1回学生会議連絡協議会フェア」参加
JISC 公式ホームページ作成
- 2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
- 4月 機関紙第9号発行第4回総会開催
「学生会議連絡協議会合同新歓」(SCN フェア 2000) 参加
- 5月 (財) 日印協会主催「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」出席
- 6月 バラーナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授を迎えてのヒアリング開催
(財) 三菱銀行国際財団・(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
機関紙第10号発行
- 8月 機関紙第11号発行
本会議団結式・壮行会開催
第4期日本インド学生会議本会議
(於: カルカッタ 8月7日~26日)
- 9月 (財) 日印協会主催「森総理南西アジア訪問」講演会出席帰国報告会主催
- 10月 「ナマステ・インディア」参加
(財) インドビジネスセンター主催「日印 IT シンポジウム」参加
(財) 日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席
- 11月 国際基督教大学学園祭参加
インド側発起人モハン・ゴーシュ氏を囲む会主催
機関紙第12号発行「学生会議連絡協議会合同報告会」参加

- 12月 第4期本会議報告会開催
 駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催
 第5回総会開催

第5期

- 2001年 1月 第5期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催
 4月 SCN フェア 2001 参加
 (財) 国際教育財団より助成金給付
 5月 機関紙第13号発行日印議員連盟訪問
 外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問
 6月 山内利男氏を招いてのヒアリング勉強会開催
 日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催
 岐阜女子大学南アジア研究センター主催
 「日印 IT シンポジウム」参加 協力
 7月 機関紙第14号発行
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付直前合宿
 国際交流基金より助成金給付福永正明氏顧問退任
 8月 第5期日本インド学生会議本会議
 (於：デリー・コルカタ 8月2日～23日)
 9月 帰国報告会開催
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 10月 「ナマステ・インディア」参加
 11月 亜細亜大学学園祭参加機関紙第15号発行
 12月 第5期本会議報告会開催第6回総会開催

第6期

- 2002年 1月 第6期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 第3期メンバーからのヒアリング
 3月 機関紙第16号発行
 4月 小野基先生（筑波大学教授）からのヒアリング開催
 SCN フェア 2002 参加
 在インド大使館後援名義受理
 (財) 国際教育財団より助成金給付

- 5月 保坂俊司氏（麗澤大学）顧問就任
（株）インドビジネスセンター後援名義受理
- 6月 勉強会集中合宿
- 7月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加
（財）日印協会後援受理
（財）アジアクラブ後援名義受理インドセンター後援受理
外務省後援名義受理
- 8月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣
- 9月 本会議直前合宿
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付
（財）吉田茂国際基金より助成金給付機関紙第 17 号発行
- 10月 （財）国際交流基金より助成金給付
（財）東京都国際交流財団より助成金給付
第 6 期日本インド学生会議本会議
（於：東京 10 月 18 日～31 日）
- 12月 第 6 期本会議報告会開催

第 7 期

- 2002 年 12 月 第 7 期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2003 年 1 月 第 7 期日本インド学生会議「本会議案」作成
- 3月 機関紙第 18 号発行
- 4月 実行委員交流合宿
SCN フェア 2003 参加
- 5月 （財）国際教育財団より助成金給付
- 6月 （財）国際交流基金より助成金給付勉強会合宿（分科会案作成）
学生会議連絡協議会情報交換会参加
（財）日印協会より後援名義受理
デリー・コルカタに先遣隊派遣
- 7月 機関紙第 19 号発行
（財）三菱銀行国際財団より助成金給付
（財）吉田茂国際基金より助成金給付
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付

- 8月 本会議直前合宿関係者挨拶回り
第7期日本インド学生会議本会議
(於：デリー・コルカタ 8月9日～9月2日)
- 10月 報告書作成
小学校訪問(社会還元事業)計4回
「ナマステ・インディア」参加
(財)東京都国際交流財団より助成金給付
- 11月 第7期本会議報告会開催
「インドの魅力を発見する会」主催パネルディスカッションに参加
- 12月 第7期本会議報告会開催

第8期

- 2003年 12月 第8期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2004年 1月 第8期日本インド学生会議「本会議案」作成
学生会議総会開催
- 2月 ミーティング開始
- 3月 大使館主催のパーティーに参加
- 4月 機関紙第20号発行
OB・OGとの懇親会第8期募集〆切(4月末)
SCN フェア 2004(29日)参加
- 5月 メンバー交流合宿(9、10日)
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
(財)国際教育財団より助成金給付
(財)日商岩井億歳交流財団より助成金給付
- 7月 機関紙第21号発行
本会議前直前合宿(31日、8月1日)
- 8月 第8期日本インド学生会議本会議
(於：デリー・コルカタ 8月11日～30日)
在コルカタ日本総領事館より後援名義受理
- 10月 第9期実行委員募集開始
「ナマステ・インディア」参加(16、17日)
小学校訪問(社会還元事業)報告書作成(10月末発行)
- 11月 第8回日本インド学生会議報告会開催(28日)

第9期

- 2004年 12月 第9期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2005年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始
- 4月 SCN フェア 2005(29日)に参加
- 5月 ミーティング開始
OBOG インタビュー実施
- 6月 合宿実施
- 7月 分科会トピック決定
- 8月 ミーティングを週2回に変更
本会議直前合宿(11・12日)
日本インド学生会議機関紙発行
第9期日本インド学生会議本会議(於:東京 8月28日~9月12日)
- 9月 第9期日本インド学生会議本会議終了(12日)
コルカタ側メンバー帰国(13日)
デリー側メンバー帰国(14日)
- 10月 報告書作成開始
日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2005」に協力(1・2日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第9回日本インド学生会議本会議報告会(11日)

第10期

- 2005年 11月 第10期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2006年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始 ミーティング開始
- 4月 SCN フェア 2006 参加
- 5月 合宿実施(26・27日)
- 6月 インド大使就任パーティー
先遣隊派遣(10日~19日)
合宿実施(23・24日)
- 7月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問
- 8月 シン大使就任パーティー
第1回インド知識経済勉強会参加
第10期日本インド学生会議本会議
(於:プーネ・コルカタ・デリー 8月24日~9月19日)

- 9月 日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2006」に協力
(23・24日)
- 10月 インディアンデイ開催(28日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第10回日本インド学生会議本会議報告会(26日)

第11期

- 2006年 12月 第11期日本インド学生会議発足
(以降毎週土曜ミーティング実施)
事業計画書・予算案作成、財団渉外・申請
- 2007年 1月 事業計画書・予算案作成、広報(新メンバー募集)
アイセック主催インド勉強会参加(7日)、財団渉外・申請
- 2月 広報(新メンバー募集)
後援渉外・申請
- 4月 (財)国際教育財団より助成金給付
- 5月 財団申請
(財)日商岩井国際交流財団(財)吉田茂国際基金より助成金給付
- 6月 OBOG会主催 第1回 JISCDAY(30日)合宿実施(30日・7月1日)
在インド日本大使館、在コルカタ総領事館、在ムンバイ総領事館より後援名義受理
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
- 7月 勉強会、模擬ディスカッション
先遣隊派遣プネー・デリー(29日～8月4日)
外務省より後援名義受理、日印交流年イベントとして認定
日印交流年実行委員より助成申請受理
(財)国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理
- 8月 直前合宿実施(12日・13日)
第11期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・プネー・デリー 8月15日～9月7日)
- 9月 本会議終了(9月7日)、反省会
日印文化交流祭「ナマステ・インディア2007」に協力(29日・30日)
- 10月 報告書作成、12期準備
- 11月 報告書完成第11期日印学生会議報告会実施
(3日オリンピックセンターにて)

第12期

- 2007年11月 第12期日本インド学生会議実行委員会足
第11期メンバーからのヒアリング
各種資料作成（事業計画書・予算書など）第1次京都先遣隊派遣
IIT 同窓会講演会（於：慶應義塾大学）を補助
- 12月 国際開発研究者協会（SRID）学生部にて講演第1次勉強会合宿
財団助成・後援の申請開始
- 2008年2月 日本インド学生会議 OBOG 総会
- 3月 第2次勉強会合宿
（財）日印協会後援名義受理
- 4月 学生会議合同説明会（日印・日越・日韓・日中・日ケ）実施
外務省後援名義受理
- 5月 インドセンター後援名義受理京都府後援名義受理
第2次京都先遣隊派遣本会議直前合宿
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付
第12期日本インド学生会議本会議
（於：東京・京都 5月29日～6月11日）
- 6月 （財）日印協会より助成金給付
- 7月 （財）吉田茂国際基金より助成金交付
- 8月 報告書完成
第12期本会議報告会実施

第13期

- 2008年10月 第13期日本インド学生会議実行委員会発足
第12期メンバーからのヒアリング
- 11月 各種資料作成（事業計画書・予算書など）
実行委員の募集
- 12月 学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
- 2009年1月 実行委員の募集 定例会
- 2月 日本インド学生会議 OBOG 総会
学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
取材（メンターダイヤモンド学生記者クラブよりウェブ記事の取材）
- 3月 学生会議評議会の合同イベントの企画と実施
予算案の見直し
（財）日印協会後援名義受理

- (財) 双日国際交流財団助成金給付
- (財) 吉田茂国際基金助成金給付
- 4月 (財) 国際交流基金助成金給付
 - 学生会議評議会合同説明会実施
 - 外務省後援名義受理
 - 在インド日本国大使館後援名義受理
 - 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 - 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
- 5月 日本インド学会議 OBOG 会主催
 - 「キャリアエクスチェンジ」参加
 - 学生会議評議会交流会
 - 学生会議合同講演会の企画と実施（日中学生会議、日露学生会議と協働）
 - 於：東京大学5月祭
- 6月 (財) 三菱 UFJ 国際財団より助成金給付
 - 学生会議合同勉強会（日中学生会議、日露学生会議と協働）
 - 勉強会合宿
- 7月 合宿
- 8月 先遣隊派遣(8月5日～)
 - 第13期日本インド学生会議本会議
 - (於：コルカタ・チェンナイ・デリー 8月17日～9月7日)
- 9月 ナマステインディア 2009 出店
 - 報告書作成
- 10月 報告書作成、決算報告
 - 財団渉外、14期引き継ぎ準備
- 11月 第13期報告会実施
 - 学生会議評議会合同報告会実施
 - 第14期引き継ぎ

第14期

- 2009年 12月 第14期日本インド学生会議実行委員会発足
 - 第13期メンバーからのヒアリング財団渉外
 - 各種資料作成（事業計画書・予算書など）定例会
- 2010年 1月 日本インド学生会議 OBOG 総会
 - メンバーリクルーティング
 - 定例会
- 2月 財団渉外
 - SCN ミーティング定例会

- 3 月 SCN イベント
 予算案見直し
 (財)日印協会後援名義受理
 (財)双日国際交流財団助成金給与
 (財)吉田茂国際基金助成金給与
- 4 月 (財)国際交流基金助成金給与
 分科会(勉強会)合宿実施(10日・11日)
 SCN イベント(25日)
- 5 月 SCN 交流会(27日)
 文化交流会(日舞・ダンス練習)合宿実施(15日・16日)
 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6 月 ソフトブリッジソリューションズ訪問(25日)
 (財)三菱UFJ国際財団より助成金給付
- 7 月 在インド日本国大使館 後援名義受理
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
 分科会(勉強会)合宿実施(3日・4日)
 直前合宿実施(31日・8月1日)
- 8 月 先遣隊派遣(8月8日～)
 第14期日本インド学生会議本会議
 (於:コルカタ・チェンナイ・デリー8月14日～9月4日)
- 9 月 「ナマステ・インディア 2010」協力
 報告書作成
- 10 月 報告書完成 決算報告
 財団渉外
 第15期引き継ぎ準備
- 11 月 第14期報告会実施(14日、オリンピックセンターにて)
- 12 月 第15期引き継ぎ

第15期

- 2010年 12月 財団渉外
 各種資料作成(事業計画書・予算書など)
- 2011年 1月 メンバーリクルーティング
 第15期日本インド学生会議実行委員会発足第
 14期メンバーからヒアリング
- 2月 財団渉外
- 3月 東日本大震災により活動休止
- 4月 予算案見直し

- 5月 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 (財) 三菱UFJ国際財団より助成金給付
合宿オリンピックセンターにて (10・11日)
- 7月 外務省後援名義受理
株式会社インド・ビジネス・センター後援名義受理
- 8月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理
JICA 後援名義受理
公益財団法人日印協会後援名義受理
- 9月 本会議直前合宿オリンピックセンターにて (3日)
経済産業省後援名義受理
在日インド大使館後援名義受理
第15期日本インド学生会議本会議 (於: 東京 9月10~21日)
「ナマステ・インディア2011」協力報告書作成
- 10月 報告書作成財団渉外
第16期引き継ぎ準備
- 11月 報告書完成決算報告
第15期報告会実施 (26日、東京大学にて)
- 12月 第16期引き継ぎ

第16期

- 2011年 12月 財団渉外
- 2012年 1月 メンバーリクルーティング
- 2月 入会希望者へのオリエンテーション
- 3月 第16期日本インド学生会議実行委員会発足
第15期メンバーからヒアリング
- 4月 (財) 双日国際交流財団助成金給与
(独) 国際交流基金助成金給与
予算案の見直し
定期勉強会開始
ブログ更新開始
新歓イベント参加 主催: 国際協力学生プラットホーム「絆」
(15日)

新歓説明会 (29日)
インド側とやり取り開始
- 5月 新歓イベントビラ設置 主催: YDP Japan Network (5日)
バンガロール訪問決定
国交樹立60周年記念イベント認定
(財) 三菱UFJ国際財団助成金給与

- 6月 笹井大嗣氏からのヒアリング
機関誌第1号発行
参加メンバー確定（リクルーティング終了）
事前合宿実施（30日・7月1日）
- 7月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
(財)日印協会後援名義受理
中津雅昭氏による勉強会
- 8月 機関誌第2号発行
在日本インド大使館後援名義受理
第16期日本インド学生会議本会議
(於：コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー 計4都市
8月8日～9月4日)
- 9月 ナマステ・インディア 2012 協力
報告書作成開始
- 10月 財団渉外
報告会準備
- 11月 報告書完成
第16期報告会（於：東京外国語大学 10日）
総会
機関誌第3号発行

第17期

- 2012年 12月 メンバーリクルーティング、財団渉外
- 2013年 1月 第17期日本インド学生会議実行委員会発足
メンバーリクルーティング
- 2月 本会議案作成、メンバーリクルーティング、定期勉強会、
インド側との調整開始
日本イスラエルパレスチナ学生会議との合同イベント
- 3月 合宿、事業計画書見直し、本会議プログラムの検討、広報
- 4月 (財)双日国際交流財団助成金給与
(独)国際交流基金助成金給与
参加者決定、分科会議題決定、本会議プログラムの検討
機関紙発行
- 5月 実行委員参加締切、広報、後援申請

- 本会議日程・内容最終調整
(財) 三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 6 月 合宿
- 7 月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在日本インド大使館後援名義受理
(財) 日印協会後援名義受理
事前合宿
機関誌第 2 号発行
- 8 月 第 16 期日本インド学生会議本会議
(於：デリー、コルカタ、バンガロール、
チェンナイ 8 月 6 日～9 月 4 日)
- 9 月 ナマステ・インディア 2013 協力
報告書作成開始
第 18 期実行委員募集開始
- 10 月 財団渉外
報告会準備
- 11 月 報告書完成
第 17 期報告会
機関誌第 3 号発行 (予定)
- 12 月 第 17 期第 2 回報告会
総会

<第二部>

活動報告

《第 18 期日本インド学生会議年間活動報告》

- 2014 年 3 月 (財)三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 5 月 (財)双日国際交流財団助成金給与
メンバーリクルーティング(17 期)
- 6 月 第 18 期日本インド学生会議実行委員会発足
メンバーリクルーティング
- 7 月 本会議案作成
定期勉強会
インド側との調整開始、
実行委員参加締切
メンバー決定
会議日程確定
- 8 月 外務省後援名義受理
(財)日印協会後援名義受理
インド側メンバービザ取得準備開始
分科会テーマ決定、定期勉強会開始
- 9 月 公益社団法人 在日インド商工協会後援名義受理
(独)国際交流基金後援名義受理
ディスカバー インディア クラブ後援名義受理
ナマステインディア 2014 協力
- 10 月 在日インド大使館後援名義受理
第 18 期日本インド学生会議本会議
(於:東京 10 月 3 日～15 日)
- 11 月 報告書作成開始
第 19 期実行委員募集開始
報告会準備
- 12 月 第 19 期引き継ぎ

《各局活動報告および反省》

実行委員長

局長：町田 日奈子

局長の一言：「実行委員長」という聞こえは大変そうだが、いいことづくめ

概要

主に、①全体の把握・統括②ミーティングの設定（内容も場所も）の二つを行う。
方向性や議論の進め方を提示していく、皆の意見を聞いていく、まとめていく...というこの団体の
要の部分をつらぬき、メンバー全員と本会議をつくっていく。

反省

主に二つ。一つ目は、もっと先輩方や各方面の方との交流機会を設定する努力をすればよかった
ということである。経験豊富な先輩方や、インド関係者や他の学生団体とのつながりがあれば、もっ
と活動の幅が広がったかもしれない。二つ目は、メンバー間の親睦を深める機会をもっと設ければ
良かったことである。準備期間が少なかったが、本会議をよりよくするために合宿やミーティング
の後の食事などもっとコミュニケーションを密に取るように呼びかけていくべきであった。

国内渉外局

局長：安福友里恵

局員：井上咲菜

局長の一言：信頼関係が大切

概要

国内渉外局は、JISC と国内の関係者の方々を結ぶ窓口だ。具体的には、後援名義の申請や本会議
開会式・報告会のご案内の作成や、やりとり等を行う。責任の大きい仕事が多いが、JISC が様々
な方に支えられていることを身を持って感じられるやりがいのある部署だ。

反省

なかなか本会議の詳細が決まらず、後援名義の申請や開会式のご案内が遅れてしまったことが反省
だ。注意不足が様々な人にご迷惑をおかけすることもあった。

財務局

局長：鈴木盛太

局長の一言：責任重大

概要

財務局の仕事は主に、JISCの活動の柱となる資金の収支を管理することだ。本会議前は、本会議中に使用のお金の試算をし、本会議中はお金の管理全般を行う。そして本会議終了後は、一年間の決算を作成し、来期の助成金の申請も行う。また、関係者様との渉外、協賛金の募集も財務の仕事である。

反省

本会議前の反省点としては、日本開催であったため、本会議中にかかる費用のほとんどをこちら側で把握し、支払わなくてはいけなかったことから予算を作成するのに直前まで時間がかかってしまった。また他局や各企画担当者とのコミュニケーション不足からミスの発覚が遅れてしまったこと。予算案について他局と頻繁にコミュニケーションを行うべきであった。本会議中の反省点としては、予定の変更や本会議中に発覚した必要経費に対して臨機応変に対応できなかったこと。

国際渉外局

局長：乳原晶子

局長の一言：インドと日本の架け橋に！！

概要

VISA申請手続き、インド側との連絡係、インド人向けしおり作成、各英語資料の作成など

反省

VISA申請のために保証人に資料をお願いするのが遅くなってしまい、結果的に申請がぎりぎりになってしまったこと。入会してからの時間がなくインド側の同窓会などについての理解が足りなかったこと。しおりに記した危機管理について徹底できなかったこと。とにかくマメな連絡、日頃のコミュニケーションが大切だと実感した。

広報局

局長：井上 咲菜

局長の一言：本会議を振り返り次に繋げていく

概要

広報局の主な仕事は、広報活動と報告書の発行である。1年を通して行われるミーティングや勉強会の内容、リクルート情報等をホームページ、ブログ、Facebook、Twitterを通して外部に発信する。また、本会議終了後に、お世話になった方々やインド人メンバーに依頼し執筆していただいたメッセージ、本会議の様子や内容等を記載した報告書を作成する。

反省

国内渉外局員としての仕事量が多くなってしまったこともあり、本会議開催前は広報局としての仕事に手が回らなかったのが最大の反省点だ。ブログやSNSを通して日頃の活動内容を外部にもっと積極的に発信するべきだったと思う。

学術局

局長：今井明

局長の一言：貴重な経験をありがとう。

概要

本会議のテーマを決定し、それを軸に日本メンバーの学術学習を助ける局である。今期は3つのテーマに沿ってグループに分かれた。そして自分の分野以外の知識の習得やプレゼンテーションの練習を目的に勉強会も行った。また今期は人員不足のため観光企画の計画や参加証の準備も行った。

反省

今期は結成が遅く人員不足の中での日本開催であったので、メンバーは分科会の準備以外の業務に時間を取られ分科会の準備が計画通りに進まなかった。またインド側メンバーとの間でプレゼンテーション能力の差を感じた。そこでもっと分科会の準備を促し、英語でのプレゼンテーション能力向上を目的とした勉強会も行うべきであった。

<第三部>

本会議報告

《第18期日本インド学生会議 実施要綱》

事業名：第18期日本インド学生会議本会議

主催：第18期日本インド学生会議実行委員会

開催期間：2014年10月3日（金）～10月15日（水）

開催地：東京都

助成：公益財団法人 双日国際交流財団

公益財団法人 三菱UFJ国際財団

後援：外務省

在日インド大使館

独立行政法人 国際交流基金

公益財団法人 日印協会

公益社団法人 在日インド商工協会

ディスカバー インディア クラブ(DIC)

協力：コルカタ 日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyokai)

チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI

国内 学生会議連絡協議会 (SCN)

日本インド学生会議 OBOG 会

春日部共栄中学高等学校

ベネッセコーポレーション

八柱幼稚園

アマチャの会

インド通信

個人：北爪裕子 様

滝澤晋司 様

近藤正規 先生

長浜浩子 先生

鈴木佑輔 様

滝澤由加里 様

糸井友也 様

岸野綾菜 様

林和沙 様

小山田里奈 様

三輪達也 様

町田日天子 様

個人協賛：松岡環 様
 長谷川時夫 様
 金井武 様
 勝田友治 様
 櫻井秀武 様
 佐野一矢 様
 鈴木佑輔 様
 佐波優紀 様
 岡部知美 様

参加学生：

日本

第 18 期日本インド学生会議実行委員会

実行委員長・総務局	町田日奈子	早稲田大学社会科学部 3年
財務局長・副実行委員長	鈴木盛太	日本大学理工学部 3年
国際渉外局長	乳原晶子	慶應義塾大学文学部 4年
広報局長・国内渉外局	井上咲菜	慶應義塾大学商学部 4年
学術局長	今井明	中央大学経済学部 3年
国内渉外局長	安福友里恵	東京大学教育学部 3年

コルカタ

President	Siddhesh Gooptu	Jadavur University
Head of Academics	Ayan Mitra	Jadavur University
Communicator	Aaleya Chanda	Culcutta University
Head of Culture	Ayantika Saha	Culcutta University
Joint Editor	Diana Banerjee	Sikkim Manipel University
Editor	Madhubarna Dhar	SSS St.Xaviers University
Head of Event Management	Rik Bhatta	Goeka college
Head of Publications	Smaran Basu	Culcutta university

チェンナイ

Akshaya Narayanan S.S.S. Jain College

コヤンバトール

President	Anitha Jai	Psgr Krishmmal college for women
	Senthilvel Mandharachalam	PSG Institute of Management
	Nivedha Ashok	PSG Institute of Management

《第 18 回日本インド学生会議日程》

日程	場所	午前	午後	宿泊
10月3日(金)	東京	出迎え準備	インド人メンバー出迎え	NYC(※)
10月4日(土)	東京	開会式準備	開会式	NYC
10月5日(日)	東京	出発、移動	文化交流	山田大橋キャンプ場
10月6日(月)	東京	文化交流	分科会①	山田大橋キャンプ場
10月7日(火)	東京、埼玉	出発	高校訪問	NYC
10月8日(水)	東京	分科会②	フィールドワーク、お食事会	NYC
10月9日(木)	千葉	幼稚園訪問	着物・浴衣着付け	NYC
10月10日(金)	東京	分科会③	ホームステイ	各ホームステイ先
10月11日(土)	東京	観光		NYC
10月12日(日)	東京	観光		NYC
10月13日(月)	東京	観光		NYC
10月14日(火)	東京	在日インド大使館表敬訪問	閉会式	NYC
10月15日(水)	東京	チェンナイメンバー出発	コルカタメンバー出発	

※NYC：国立オリンピック記念青少年総合センター
 (The National Institution for Youth Education)

Date	Place	Morning	Afternoon	Accommodations
Fri Oct 3rd	Tokyo	Arrangements for receiving	Receive Indian members	NYC(※)
Sat Oct 4th	Tokyo	Arrangements for Opening Ceremony	Opening Ceremony	NYC
Sun Oct 5th	Tokyo	Leaving NYC	Cultural exchange	Yamada Ohashi camp lodge village
Mon Oct 6th	Tokyo	Cultural Exchange	Conference1	Yamada Ohashi camp lodge village
Tue Oct 7th	Tokyo, Saitama	Leaving	Discussion with high school students	NYC
Wed Oct 8th	Tokyo	Conference2	Fieldwork, Dinner with businessman	NYC
Thu Oct 9th	Chiba	Visiting a kindergarten	Cultural experience	NYC
Fri Oct 10th	Tokyo	Conference3	Homestay	Homestay
Sat Oct 11th	Tokyo	Sightseeing		NYC
Sun Oct 12th	Tokyo	Sightseeing		NYC
Mon Oct 13th	Tokyo	Sightseeing		NYC
Tue Oct 14th	Tokyo	Courtesy Visit to Embassy of India, Tokyo	Closing Ceremony	NYC
Wed Oct 15th	Tokyo	Departure of Chennai members	Departure of Kolkata members	

本会議日録

10月3日～15日 Tokyo (Japan)

10月3日（金）担当者：安福 友里恵

13:00	コルカタ出迎え組、羽田空港集合
13:55	コルカタメンバーと合流
16:30	コルカタ組オリセン到着
18:00	チェンナイ出迎え組、成田空港集合
19:00	チェンナイメンバーと合流
22:00	チェンナイ組オリセン到着
23:30	就寝

今日はいよいよインド側メンバーとご対面の日。私はまだ実感を持てずにいた。前日も夜遅くまでミーティングをして忙しく、心構えをする時間が無かったからかもしれない。私は午前中大学で授業を受けて後、オリンピックセンターに向かいチェックインの手続きを済ませた。たくさんの鍵やシーツを受け取ると、ようやくふつふつと緊張感が湧いてきた。委員長に作業を託して、チェンナイメンバーの出迎えに成田空港へ向かった電車の中で、コルカタ組が無事にオリセンに到着したという報告を受けた。いよいよ始まるのだと身が引き締まる思いがした。

空港で日本人メンバーと合流して、メンバーの名前と JISC のロゴを印刷した看板を掲げ、ドキドキしながら彼らの到着を待った。想定していた時間になっても出て来なかった為少しおそろしたが、チェンナイメンバーは無事に到着した。初対面でとても緊張していた私に対して、彼らは疲れを見せず笑顔で、優しく接してくれたのでとても嬉しかった。そして新宿駅に向かうバスの中で彼らと飛行機のことや、これからの予定など他愛もない会話を交わしていると、どんどん緊張はほぐれ、この 10 日間が実りのあるものになることを予感し、わくわくした。この本会議は刺激的で、楽しいものになるだろうと思った。新宿駅からタクシーでオリセンに向かい、到着は 22 時を過ぎた。



9:30~12:00	オリエンテーション
15:00~17:00	後樂園駅周辺を観光
18:20~19:20	開会式
19:50~21:30	文化交流会

いよいよ今日から本会議が始まる。開会式は午後の遅い時間だったため、午前には本会議のプログラムなどのオリエンテーションを行った。午後は、開会式会場が後樂園であったので、開会式まで後樂園周辺をみんなで散策した。インドメンバー日本の遊園地や東京ドームなどを見るや否や、無邪気な子供のようにはしゃいでいた。

開会式は、時間通り 18 時 20 分から開始。今年度は日本側のメンバーが少なかったため運営がうまくまわるか心配していたが、インド側の助けもあり順調に進んだ。

日印協会の理事、在日インド商工教会の理事長など日本とインドの架け橋として重要な面々がそろい次第にメンバー全員が緊張していくのが感じられた。来賓の方々からご挨拶を頂くと、口をそろえて日本とインドのよき未来を願い、またこの機会を通して日本の良さを学んでほしいとおっしゃっていた。私は迎え入れる側として、このお言葉に少しプレッシャーを感じたが、またそのプレッシャーが本当に本会議は始まったのだという実感を与えてくれたことを覚えている。

後半の文化交流会は、日印両国の催し物が披露された。日本側は、AKB のフォーチュンクッキーのムービー、日本舞踊、インド側は素敵なお衣装に身を包まれながらのダンスとベンガル語の古い歌、また来賓からはマリク先生が歌を披露してくださいました。どれも素晴らしかった。カメラで動画をとっておけばよかったと後で激しく後悔したくらいである。

無事に開会式が終わり、これから本会議がどのように進んでいくのか楽しみである。



7:00	起床
7:30	朝食 (オリンピックセンター)
9:30	折り紙
11:30	昼食 (オリンピックセンター)
13:00	オリンピックセンター出発
15:30	山田大橋キャンプ場到着
17:00	買い出し
19:00	夕食準備、BBQ
23:00	就寝

朝オリンピックセンターに全員集合し、チェックアウトを済ませ、インド側メンバーの大きなスーツケースを業者に頼んでキャンプ場まで運んでもらった。台風の接近に伴う激しい雨と風の中、二泊三日のキャンプを強行するのに不安はあったが、「むしろ日本の台風を経験できるなんてラッキーじゃないか」とインド側メンバーに言われて少し救われた。キャンプ場までは電車で約2時間、徒歩20分という長旅で、「あと何駅で乗り換えか、あと何分かかかるのか」と質問攻めにあい、日本人ほど移動や歩くことに慣れていないのだと感じた。インドでは、家で雇われている運転手が学校などに連れていってくれるそうだ。ようやく山田大橋キャンプ場にたどり着くと、歓声の声上がる。「こんな素敵なログハウスで生活できるなんて夢みたい!」と大はしゃぎしている様子を見て、このキャンプ場を探し当てた甲斐があったと嬉しかった。翌日台風が関東地方を直撃するという予報を聞き、インド人の女の子たちが入れてくれたチャイを飲み終えると、約2日分の食料を最寄りのスーパーまで買いに行くことになった。降りしきる雨の中、歩いて30分もかかる道のりを、重い荷物を抱えながら往復するのは半ば拷問だったが、インド人メンバーほぼ全員が買い物や荷物運びを手伝ってくれたおかげでなんとか必要なものは全て揃えることができた。キャンプ場につくと早速夕食作りに取り掛かる。日本側はバーベキューを振る舞い、インド側はビリヤニを作ってくれた。料理や食事を通して自然と会話も弾み、お互いの中を深めるとても良いスタートとなった。



9:00	朝食
10:00	スポーツ
12:00	昼食
13:00	リバーサイド散策
15:00	クッキングパーティー
18:00	分科会
20:00	花火
23:00	就寝

台風の影響で一日中ログハウスに待機かと思いきや、寝ている間に台風が過ぎ去ったおかげで、意外と屋外のアクティビティーを楽しむことができた。午前中は、インド人メンバーが移動で疲れていることを考慮して、遅めの朝食をとり、キャンプ場内でfrisbeeやバドミントンなどのスポーツで体を動かしながらゆっくりと過ごした。当初、午後にサマーランドに行くことになっていたが、残念ながら台風のため中止にしてしまった。代わりにキャンプ場近くの川沿いを散歩した後、お互いの国の料理を作るクッキングパーティーを実施することにした。日本食では、焼きそば、たこ焼き、お好み焼き、お寿司を、インド食ではビリヤニ、カレー、ポテトフライを一緒に作り、結果的にとても良い文化交流になった。インド人は宗教やベジタリアンの関係で食事に制限があるメンバーが多く、食材にはなかなか気を使ったが、できる範囲で作った日本食に積極的に挑戦してくれて嬉しかった。特に焼きそばとお好み焼きは大人気で、あっという間になくなってしまった。パーティーの後は気持ちを一気に切り替えて、第一回目の分科会を行った。テーマごとに3つのグループに分かれ、約二時間プレゼンテーションやディスカッションを行い、お互いの国の違いや共通点などを見つけながら意見を言い合うことができ、とても有意義な時間となった。特に私の教育班は議論が白熱し、他のグループが分科会を終えた後もしばらく議論が続いたため、他のグループのメンバーも教育の議論に加わりながらディスカッションを続けた。インド人メンバーに負けないように自分の意見をしっかり主張するのは大変だったが、とても刺激的で貴重な経験ができたと思う。



7:00	起床、朝食
9:30	チェックアウト、出発
12:00	春日部駅到着、昼食
12:30	春日部共栄高校到着
13:30	分科会プログラム開始
15:00	分科会プログラム終了、校内見学、茶道部の活動見学
17:00	春日部共栄高校出発
18:30	オリンピックセンター到着、夕食
22:00	就寝

慌ただしく朝食とチェックアウトを済ませた後、再び業者にスーツケースを預け、埼玉県
の春日部市に向かう。春日部は私の地元であり、今回分科会の一環として訪問させてもら
うことになった春日部共栄高校は私の母校でもある。高校訪問の企画を提案させていただ
いたのが、なんと実施日の一週間前という無謀なお願いをしてしまったにもかかわらず、
春日部共栄高校の担当教諭の皆様および生徒たちのご協力とご厚意により、この企画を成
功させることができ感謝してもしきれない。改めて春日部共栄高校の国際教育への意識の
高さやホスピタリティー、柔軟性に感銘を受けた。思い返せば私が大学で国際交流活動に
積極的になるきっかけを与えてくれたのは母校の存在がとても大きいと思う。約2時間の
企画内容は、日本側メンバー4名とインド側メンバー12名、そして高校生13名に分科会
のテーマである環境・福祉・教育の3つのグループに分かれて座ってもらい、30分のゲー
ム、45分のディスカッション、10分のまとめ、5分の発表、15分のフリートークを行っ
た。私は司会として全体を概観しながら進行役を務めさせていただいたのだが、難しいテ
ーマにもかかわらず、自分の後輩たちがインド人たちの話に真剣に耳を傾け、英語を使い
ながら一生懸命ディスカッションに参加している姿を見てとても嬉しかった。インド人も
また、日本の教育など自国との違いについて積極的に質問をされていてとても良い雰囲気だ
った。限られた時間ではあったが、この企画が少しでもお互いの将来にとって有意義な
ものとなってくれたらと願っている。なお、写真でメンバーが着用している麦わら帽子は、
春日部共栄高校の甲子園応援でも使われた、春日部市の伝統工芸で、学校からプレゼント
としていただいたものである。



	グループごとに分かれフィールドワーク。以下は教育グループの例。
11:00	企業見学(ベネッセコーポレーション)
11:30	ベネッセコーポレーションの方からの企業説明
12:00	ベネッセコーポレーションの社員の方も含めてのディスカッション
14:00	新宿にて昼食。その後新宿散策 3グループが合流(原宿)
18:30	原宿にて在日インド人の方を含めた食事会

福祉、環境、教育の3グループごとに分かれてフィールドワークを行った。福祉グループ、環境グループ、教育グループはそれぞれ、調布にあるちょうふ若者サポートステーション、江東区にある日本未来科学館と TOYOTA MEGAWEB、多摩市にあるベネッセコーポレーションにてグループワークをした。私は教育グループなのでここでは教育グループのフィールドワークについて述べる。その他のグループを含めたフィールドワークの詳細はフィールドワーク報告の項を参照。

フィールドワークの後、3グループは原宿で合流し、JISC 関係者の方である滝澤さんとその方の同僚である在日インド人の方と原宿にあるインド料理店で食事会をすることができた。食事会では同僚や近所の方との関わりを大切にしているインド人の国民性や、日本人とインド人の時間感覚の違いなどの話を聴くことができた。この話をきいて、私は今までインド人の方と一緒に働くことを考えたことはなかったが、これからの時代インド人の方と働くことがあるかもしれないと思った。そして食事会での話と本会議での経験によってインド人の方と働くということのイメージが明確なものになった。インド側メンバーもしばらく食べていなかった故郷の料理を食べ、日本で働いているインド人の方から貴重な話を聴くことが出来てよかったと言ってくれた。この食事会は日本・インド双方のメンバーにとって大変有意義なものとなった。滝澤さんありがとうございました。



8:00	朝食
9:30	出発
11:00	八柱幼稚園到着 お昼（幼児の皆さまとともに）
14:00	八柱幼稚園出発
18:00	夕飯
19:00	着物着付け体験（北爪様による）

【八柱幼稚園の訪問】

私、町田の母校である千葉県幼稚園へ伺った。狙いとして、インド人メンバーは日本の幼稚園の実態を知り、日本の子ども達との交流を持つこと、園児の皆さんはインドの方々との遊びを通じて生の国際交流を体験してもらうことであった。しっぽ取り、玉入れに参加させて頂き、園児の皆さんと一緒に校庭を駆け回った。またお昼の時間には、各教室に入って一緒にランチ、自由時間には砂遊びやサッカー…と、言葉の壁を越えた楽しい時間を過ごすことが出来た。帰路では、あるインド人学生が「インドでは幼稚園で英語のABCを学ぶ…」と教えてくれ、日印での幼児教育の違いなどにも思いを馳せることが出来た。

【着物着付け体験】

北爪様のご厚意と長浜先生のご協力のおかげで、滅多に体験できることではない「着物の着付け」体験ができた。女子メンバーは髪の設定から始まり、キレイな着物を着付けて頂き、男子メンバーは急きょ浴衣を用意し着てもらった。また、日本人女子メンバーもサリーを着せてもらい、衣服による文化交流が実現した。女子が特に喜んでくれて、大変楽しい時間であった。



7:00	起床
8:00	朝食
9:00~12:00	分科会 2
12:30	昼食
13:30~	渋谷観光
18:00	夕食

午前中は最後の分科会を行った。後援をして下さっている三菱財団の担当の方もいらっしやり、各班のプレゼンテーションやディスカッションの模様を見て頂く形となった。各班、終わる時間がばらばらだったので、早めに終わった班はディスカッションを続行している班の発表を聞き、議論に加わるなどした。たつぷりと時間を取り、それまでの分科会やフィールドワークのまとめについて話し合うことができ、お互いにとって有意義な時間となったように思う。

午後は、元々の予定ではフリータイムだった。しかし、天気予報で、週末に大きな台風が上陸すると伝えられ、日曜の原宿、渋谷観光企画が潰れることが懸念された。そのため、考えた結果、多数決をとり、全員で渋谷へ観光に行くこととなった。ずっと原宿や渋谷で買い物をすることを心待ちにしていた学生たちががっかりさせたくないという思いがあった為、少人数でも運営メンバーの予定を考慮して交代などしながら引率をすることとなった。とても驚いたのは、普段なかなか、足が重いインドの学生達が渋谷へ行くことが決まった瞬間から目を輝かせて、全ての行動が日本人よりも早いほどテキパキとしたことだ。そんな純粋な学生たちがとても微笑ましかった。

渋谷の観光では、100円ショップのセリエや109、スクランブル交差点などを楽しんだ少人数で回ったので、全員が満足のいくように買い物をしたように思う。



7:00	起床
9:30	オリセン出発
11:00	浅草観光
13:30	東京スカイツリー観光
17:30	オリセン到着
18:00	各々ホームステイ先へ

この日は、午前から夕方まで観光、その後メインイベントの一つのホームステイという流れである。

朝、オリセンを出発し浅草門で観光ボランティアの方々とは合流し、集合写真を撮った。インド人メンバーは浅草の日本っぽさに喜び、たくさん写真を撮っていた。仲見世通りは観光客であふれかえっていたので、グループを3つに分けて観光することにした。私のグループは早くお寺に行きたいメンバーと買い物をしたいメンバーがいた。お寺ではインド人男子メンバーがおみくじをひいたが、凶だった。後で聞けば、おみくじを引いたインド人男子メンバーは皆凶だったそうだ。ある意味すごい確率である。女子メンバーは買い物に時間をかけ、家族や恋人へのお守りを選ぶ目はとても真剣だった。

その後、東京スカイツリーに行った。インドではここまで高い建物は無いそうで、皆とても興奮した様子だった。先ほどのグループで昼食、観光をすることになり、私のグループはインド人メンバーだけの希望でケンタッキーで食事をした。「ケンタッキー最高！」といってほおぼる様子はとても可愛らしかった。入場券を事前に買っていなかったため時間が無く、展望台に上がれなかったのはとても残念だったが、また日本に来てほしいなと思った。

夜は大きなイベント、ホームステイだ。私の家は残念ながら受け入れることができなかったが、次の日インド人メンバーは各々嬉しそうに写真を見せてくれた。お祭りに行けて楽しかった、こんな美味しいご飯を食べた、家族の人が優しかった等々、様々な感想を聞かせてくれた。とても楽しんだ様で、私も嬉しかった。



11:00	ホームステイ先からオリンピックセンターに到着
12:00	オリンピックセンターにて昼食
14:00	東京駅散策。新幹線をみる
15:00	秋葉原観光
18:30	食事会

午前中、インド側メンバーはホームステイ先に滞在していた。ホームステイ先からオリンピックセンターに戻ってきたインド側メンバーはホームステイに満足しているようで、彼らは思い思いにホストファミリーと何をしたかを教えてくれた。

午後からは観光をした。まず東京駅で新幹線をみた。これはインド側メンバーが来日前から希望していたことで、ホームの先頭に行き写真撮影をした。新幹線に乗せてあげることが出来なかったのが残念だがインド側メンバーは満足していたようだ。

その後東京駅から秋葉原に向かった。秋葉原に行くこともインド側メンバーが来日前から希望していたことで、インド側メンバーの中にはアニメ好きが多く私よりも日本にアニメに詳しい人もいて驚いた。また来日前に友人から電化製品の買い物を頼まれている人や来日前から買うものを決めている人もいた。秋葉原はインド側メンバーから大変好評であった。

日本酒や熱燗を飲んでみたいというインド側メンバー(もちろん成人)が比較的多かったので秋葉原にある居酒屋で夕食をとった。そこではみんなで盛り上がり、親交を深めることが出来た。



7:00	起床
12:00	昼食
13:00	原宿観光
18:30	夕食

午前には17期の大澤さんと、大津さんがオリンピックセンターを訪れてくださった。昨年の本会議にも参加していたインド人メンバーが4人いたので、一年ぶりの再会に朝から大盛り上がりだった。一緒に食事を楽しみながら、思い出話に花を咲かせたり写真を撮ったりと、ゆっくり過ごすことができた。

午後から井上と乳原で原宿、渋谷の観光を引率した。当初の予定では、ボランティアの方々にきて頂き、班に分かれて観光をする予定だったが、台風の影響で、予定をキャンセルし、天候に合わせた対応をすることとなった。幸い、台風は夜から朝にかけてだったので、お昼からは外に出ることができた。

インド人学生に尋ねたところ、もう一度原宿の竹下通りに行きたい！という声が多かったので即決した。印象としては、ダイソーはもちろん、Forever21など価格の安い商品をインドにいる家族や友人に買う学生がとても多かった。また、甘いもの好きのインド人にとって、クレープはとても好評だった。

竹下通りは十日間の会議中、3回目となったが、「何度行っても飽きない！！」という声が多く、喜んでくれる姿を見ていると、こちらとしてもとても嬉しくやりがいを感じた。運営側の人数が少なく、またオリンピックセンターで毎日のように時を共にしてきたからこそ、彼らの要望に合わせて臨機応変に動くことができ良かったと思う。



7:30 頃	起床
8:30	朝食
10:00	インド大使館への表敬訪問
13:00	昼食
15:00	閉会式
18:00	パーティー

【インド大使館への表敬訪問】

絶対遅刻などしてはならないと思い策を練ったおかげで、最後の最後にこの本会議で一番予定通り正確にいった「集合」であったといえる。メンバーがワドワ大使に今回の活動報告等をお伝えし、大使から貴重なお話も伺うことができた。日印両メンバーとも、この活動の大事さ、日本とインドの今後について考えさせられた。大使の熱いお言葉を頂くことができ、素晴らしい時間であった。

【閉会式】

オリンピックセンターに戻り、お昼を食べてひと段落してから、閉会式を始めた。この本会議の締めくくりということで、乳原が作成したムービーを観て、本会議を振り返り、ひとりずつ感想を述べて長浜先生から参加証を受け取った。また、日本側メンバーからの参加記念品ということで、インド側メンバーの名前を漢字にあてて扇子に書いたものをひとりひとりプレゼントした。漢字の意味について皆が盛り上がり、喜んでもらえたようであった。予想外のインド側からのプレゼントがありプレゼント交換のようであった。

【さよならパーティー】

オリンピックセンターのレストランの一角で、最後の晩餐を行った。日本側からサプライズで愛情と思い出の詰まったスクラップブックをひとりひとりに渡した。



10:30	チェンナイメンバー 帰国
16:40	コルカタメンバー 帰国

本会議最終日、正直この日まったく最終日という感じがしなかった。明日もいつもと同じようにオリンピックセンターに迎えにいき、いつも通りみんながいて、その日もくたくたになるまで一日過ごす気がした。そう思うてしまうほど毎日が濃く、充実した時間だったので。私は、コルカタメンバーの見送りしか行けなかったが、彼らもまた日本に絶対くると口をそろえていっていたし、いつインドに来るの？と何回も聞かれた。また、後になってチェンナイ側の見送りに行ったメンバーに聞いた話だが、彼らとの別れが名残惜しくて泣いてしまったようである。参加者各々違った本会議があったと思う。インドをより好きになった者もいえば、今まで気が付かなかった日本の良さに気付いた者もいたと思う。私にとっては長かったような短かったような10日間だったが、一生忘れられない時間となった。



分科会レポート

MEMBER

Welfare	Hinako Machida Yurie Yasufuku Siddhesh Goptu Ayantika Saha Anitha Jai
Environment	Shoko Ubara Seita Suzuki Diana Banerjee Smaran Basu Senthil Vel Mandharachalam
Education	Sakina Inoue Akira Imai Ayan Mitra Aaleya Chanda Rik Bhatta Nivedha Ashok Akshaya Narayanan

★日本側プレゼンテーション★

★Welfare

日本側参加者	町田 日奈子 安福 友里恵
インド側参加者	Anitha Jai Ayantika Saha Madhubarna Dhar Siddhesh Gooptu

★テーマ 少子高齢化社会について

★概要

日本において急速に進んでいる少子高齢化は、インドに通ずるものがあるという見解から、日本の少子高齢化社会について発表を行った。

内容としては、現在は人口爆発によって高齢者の割合は少ない、且つ平均寿命が低く、まだ介護なども問題が顕在化していないインドについて触れ、日本の人口ピラミッドとの比較等も行った。それから日本の高齢者率の推移や、世界のなかでダントツで高齢化の道を歩んでいる日本の現状、特に「寝たきり老人」について述べた。寝たきりにならないための介護予防という視点から、日本で行われている運動や、推奨されている取組についても紹介を行った。インド人学生に日本のとても深刻な社会問題である高齢化社会の現状を知ってほしい、どのように感じるのか感想を聞いてみたいという思いから、このテーマを扱った。

★総論

発表の終わった議論のなかで、「なぜ日本人は少子化がそんなに進んでいるのか」「結婚についてはどう考えられているのか」というもので盛り上がった。日本では独身が増えているとか、物質的に豊かな社会であるほど出生率は低くなるという話を日本側がすると、やはりインドとの結婚に対する考えとはとても異なることがわかった。また、彼らにとって親の世話をするという考えは当たり前のようで、日本における「介護」という概念はあまりなじまないようであった。これからインドがどのように変わっていくかわからないが、介護問題が深刻化することは必須であろう。先に行く日本として、また個人的に興味のある分野であるので、もっと勉強し、今後インドを訪れた時にそのような観点からインドを見ようと思わされた発表になった。



★Welfare

日本側参加者	安福 友里恵 町田 日奈子
インド側参加者	Anitha Jai Ayantika Saha Madhubarna Dhar Siddhesh Gooptu

★テーマ 日本の若者の雇用状況

★概要

日本の雇用の特徴として、若者の新卒一括採用と賃金の年功制、終身雇用制度が挙げられる。しかし90年代以降の産業構造の転換や不況の影響で、終身雇用は崩れ、非正規雇用の割合が上昇し、現在その比率は全労働者の35%に達している。とりわけ若者においてその割合の増加率は著しい。非正規雇用の問題点としては、雇用が安定しないこと、社会保障が及びにくいこと、賃金が低いこと等が挙げられる。一方で正規雇用も、ブラック企業が近年話題になっているように、過剰労働やパワハラ、雇用条件の悪化による過労死や過労自殺の増加が問題になっている。このように非正規雇用のみならず正規雇用にも問題があるが、両者へのお互いの理解はあまり進んでいないと思われる。

また、若者の労働問題としてはニートが挙げられることが多い。ニートとは「15～34歳で、非労働力人口のうち家事も通学もしていない者」（厚生労働省定義）で、その数は60万人程で横ばいだが、90年代からその割合は上昇している。日本でニートというと、怠け者で無気力、わがままというイメージがついている。しかし実際は働きたい気持ちがある人が多い。病気や怪我で働けない、というのが実情だ。また、同じく働きたい気持ちがあるが、自信が無い、希望する職業がない、仕事を探したが見つからなかったという人も多い。そのような人は自身への正しい認識と職業への知識が不足しているだけで、それを補えば働けるのではないかとも言える。そういった観点から、若者の就職をカウンセリングや職業体験を通じて助ける仕組みが日本にはあることを紹介した。

★総論

日本とインドでは就職の仕組みがかなり異なっていることが分かった。日本では大学在学中から就職活動をし、自分から企業へ履歴書を送り、面接を受けるという形だが、インドではwebを通じて、企業の方からアプローチがあるという形だという話だった。いわゆる家族や知り合いの紹介という形も一般的であるらしい。また、自分の家業を継ぐという人も多いらしく、企業に就職するのが主な日本とはその点も大きな違いであると言える。転職が一般的であるインドと違い、終身雇用制度というのも日本特有の制度であることを改めて感じた。

インドでもブラック企業という言葉こそ無いものの、過剰労働は実態としてあるという話だった。しかしそれはあまりにも当たり前すぎて、問題にならないらしい。自分の母親は銀行で働いているが休日出勤は当たり前で、有給休暇も中々取れない上に低賃金だという話を聞いた。また、近年インドではIT産業が盛んだが、その働きぶりはとても過酷で、自分は絶対に就きたくないと語っていた。過剰労働問題というのはどの国にも存在するのだと感じた。

ニートの話では、インドでは働いていない人も多いのでそこまで問題として意識していない様だった。やはりここでも、国によって雇用形態、慣習、問題となっていることが全く違うことを感じた。そしてそこにはインドと日本の家族のあり方の違いが大きく関わっているように思う。インドではたくさんの親族と共に同じ家に住み、一家で様々な人の収入によって生活するため、助け合って生活している。日本では、就職したり結婚したら家を出て、親に頼らずに核家族または一人で生活する人が多い。一人にかかる負担が大きいのではないかということを感じた。



★Natural Environment

日本側参加者	<u>乳原晶子</u> 鈴木盛太
インド側参加者	Smaran Basu Diana Banerjee Senthil Vel Mandharacharam

★テーマ：日本の自然災害、原発問題について、日本の四季、異常気象について

★概要

①地球温暖化問題...日本は四季の区別があり、伝統や生活習慣も古来から四季に根付いている。しかし、近年、地球温暖化による異常気象現象が多く見られ、過去50～100年の間には見られなかったような事象も多い。

②原子力エネルギー...日本は世界有数の災害大国である。3.11 や最近では御岳山の噴火など、いつどこで自然災害が起ころうとおかしくはない。しかし、福島第一原子力発電所の災難で明るみに出たように、原子力発電のエネルギーに頼り続けてきた現実がある。そして今は原子力発電を再稼働させるかどうかの議論が絶えない状況にある。

★総論

3.11 や原発事故など、インドでも話題になり学生達も知識が多い印象だった。しかし、未だ原発を保持していて、再稼働への議論が絶えない現実にはとても驚いたようだった。インドで暮らす学生たちにとっては、四季の明確な区別やまた、自然災害については馴染みがないようで、とても興味を示してくれた。ディスカッションでは、「お金をもらえれば原発の近くに住みたいと思うか」、「経済発展のために原発をとるか」などについて話し合った。



★Natural Environment

日本側参加者	乳原 晶子 鈴木 盛太
インド側参加者	Smaran Basu Diana Banerjee Senthilvel Mandharachalam

★テーマ：原発

【目的】

日本の環境や自然災害を切り口に、日本の環境問題について考える。また日印両国共通の問題について議論し、解決案を模索する。

【概要】

日本では近年、異常気象が相次いでいる。その日本の現状を説明すると共にその過程で日本の環境と自然災害を知ってもらおう。自然災害が日本の環境問題にどう影響しているのか、そして両国の共通の課題として今回は原発を話に挙げ、インド側は原発をどのように問題視しているのか尋ねた。

【議論の流れ】

プレゼンテーションでは、まず日本の四季について説明した。その四季が近年の異常気象により気候が変わってきていると述べ、自然災害、福島第一原発、そして最後に質問という流れで行った。

【質問】

質問では、「もし政府からお金をもらえたら、原発の近くに住めるか」「原発に賛成か」の2つを尋ねた。原発問題は日本でも近年メディアで話題になり、原発を稼働するべきなのか、何方付かずであったため、答えが出にくいと考えていたが、彼らの答えは「原発の近くには住みたくない」と「原発に賛成」であった。理由は、インドの電力不足は深刻であり、電力を補うには原発は必要であるが原発の近くは危険であるため自分は住みたくないとのことだった。

【総論・反省】

日本の自然や自然災害、現在日本が抱えている環境問題について話す良い機会になったと思う。また、インド人の環境に対する考え方も聞くことができてよかった。反省点としては、質問の内容が抽象的であったこと。内容がより身近でかつ具体的であればより話を掘り下げて議論できたと思う。



★Education

日本側参加者	井上 咲菜 今井 明
インド側参加者	Aaleya Chanda Ayan Mitra Rik Bhatta Nivedha Ashok Akshaya Narayanan

★テーマ：日本の教育の質～詰め込み教育とゆとり教育～

★概要

効率性が重視されていた高度経済成長期においては、詰め込み型教育が浸透していた。しかし、詰め込み教育を背景としたストレスにより、いじめや学校内暴力、非行、生徒の画一化など多くの問題が発生し、社会問題ともなった。これを受けて、2002年度からゆとり教育が本格的に取り入れられ授業時間の削減やカリキュラムの見直しが行われた。近年子供の学力低下が見られるが、ゆとり教育が直接影響を与えているのかどうか議論されている。ゆとり教育と詰め込み教育双方にメリット・デメリットがあり、一概にどちらが良いかは判断し難い。

★総論

ゆとり教育と詰め込み教育のどちらが有効かは議論の余地があるが、ゆとり教育においては、生徒の知的好奇心を刺激し、思考力や想像力、コミュニケーション力を高めていく工夫が必要である。インドにおいても意外に学校の試験対策や受験合格を目的とした勉強が行われており、塾や通信教育も存在するという点において日本の教育環境と似ているところがある。また、インドでも上位大学への進学や就職先が非常に重視されているが、子供に対する親からの期待や圧力が原因で自殺する子供の数が多いという事実には驚いた。そして、受験においては、身分によって学校への入学定員が決められているなど、カースト制度を背景とした根本的な教育制度上の問題を抱えていることを知り、改善の必要性を感じた。



★Education

日本側参加者	今井 明 井上 咲菜
インド側参加者	Aaleya Chanda Ayan Mitra Rik Bhatta Nivedha Ashok Akshaya Narayanan

★テーマ：大学生の学力低下

★概要

現在「ゆとり教育」によって日本の中高生の学力低下が問題となっている。その一方で日本の大学生の学力低下も問題となっている。なぜ日本の大学生の学力低下が起きているのか。それにはゆとり教育以外にも問題があると思われる。その原因を考察し解決策を考える。

★総論

その理由は主に2つがあげられる。

1 つ目は少子化と私立大学の急増によって大学進学希望者のほとんどが大学に入れるようになり、勉強をしつがらない人も大学生になれるようになったことだ。これによって一部の熱心な学生を除いて、大学生の平均的な学力は低下した。

2 つ目はそもそも大学生が勉強しつがらないことにある。過半数の大学生が就職のために入学したという調査もあるように就職のために大学に進学する人が多い。その一方で企業の多くが就職活動において大学での成績を評価しないところが多い。そうなるとう大学生の多くが就職のために入学しているのだから、多くの大学生は勉強しなくなる。また大学の教員が厳しく成績の評価をつけると学生からの人気なくなり受講者が激減してしまう。それを嫌がり生徒の成績を甘くつけ自分の研究に集中するようになる教員も出てくる。そうなるとう企業はさらに就職活動において成績を評価しなくなる。そこで悪循環が生まれるのだ。

この問題を解決するために、大学や政府は企業の就職活動において成績の重視するように促し、企業が信頼できるぐらいに厳しい成績をつけることも一案だ。



★インド側プレゼンテーション★

★Welfare

日本側参加者	安福友里恵 町田日奈子
インド側参加者	Anitha Jai Ayantika Saha Madhubarna Dhar Siddhesh Gooptu

Poverty in India & Japan: A Comparative Study

The question of class inequalities (and the causes behind it) is one that I have long been interested in. Although a student of English Literature, I nonetheless felt an impulse to attempt to understand the reasons behind a problem that has a long and troubled history in my own country, and one that has slowly been on the rise in Japan. After all, poverty does not merely leave an economic impact, but a social and political one as well – one that affects each and every strata of society.

Within this presentation, I explored the various causes of Poverty in India, ranging from the political and economic policies of bad governance and exploitation of poor workers by the powerful, to the social problems of globalization and overpopulation. Then, I took a look at some of the effects of this problem in my country, especially its effect upon women and children, and how the cyclical nature of Poverty gets strengthened the longer it is allowed to run unchecked. Finally, I mentioned some of the solutions and initiatives taken by the Indian government as well as NGOs in order to tackle this problem.

I then turned to the question of poverty in Japan. Although it is a popular misconception that Japan is a country that does not have a serious disparity within its economic classes, I attempted to show that with the recent market fluctuations and economic policies, the number of poor and lower-class people are on the rise within Japan – causing the country to fall into debt. Despite lack of media coverage, it became clear that this was a problem that was to get worse if left unattended, and would require intervention on the part of the Japanese government. We discussed the difference in perception of poverty between Japanese and Indian people, and how becoming desensitized to poverty in fact makes it worse.

Finally, I touched on the requirement of a large-scale coordinated effort on a global scale to combat this problem. I stressed particularly upon the beneficial role university students can play in this effort, as they have both the time and energy to devote to this project without yet having to face the pressure of earning a living.

★Welfare

日本側参加者	安福友里恵 町田日奈子
インド側参加者	Anitha Jai Ayantika Saha <u>Madhubarna Dhar</u> Siddhesh Gooptu

Social Welfare – ‘Animal Welfare’

We were divided into three groups according to our table topic discussions which were ‘Social Welfare’ , ‘Education’ and ‘Natural Environment’. I was under the table of ‘Social Welfare’ whose members were Siddhesh Gooptu, Ayantika Saha, Anitha Jai, Yurie Yasufuku, Hinako Machida, and myself. My presentation was about ‘Animal Welfare’. I feel very strongly about animal rights and I have a pet at home so I thought that this would be a presentation which would have my heart in it.

I discussed about what Animal Welfare is and how the standard of Animal Welfare varies in every country. I also explained the problem of street dogs in India ; the problems we as human beings face and the problems they face. Then I tried to explain the relationship between human needs and animal welfare in this context and how both are important for the development of a nation as a whole. I had also added a detailed description of the Animal Welfare Board of India and the laws against Animal Cruelty in our country. The role of NGOs was a significant part of my presentation since the popularity of NGOs is on the rise in India right now. I also put forward the problem of endangered species and why animal conservation was important. I spoke about some of the campaigns in India ranging from Prevention of the Caging of Birds to Project Tiger. I briefly described the recent problem of the Elephant Corridors as well. I wrapped up my presentation with a conclusion about what we as citizens can do for the betterment of animals and the present status of Animal Welfare in India. “The greatness of a nation and its moral progress can be judged by the way its animals are treated.” – Mahatma Gandhi.

★Welfare

日本側参加者	安福友里恵 町田日奈子
インド側参加者	Anitha Jai <u>Ayantika Saha</u> Madhubarna Dhar Siddhesh Gooptu

Difference between Japanese wedding and Indian wedding

Japanese wedding

The Betrothal Ceremony- In this ceremony exchange of gifts between bride and grooms families. The gifts are Konbu, folding fan. Money around \$5000 tucked in envelops called Shugi Buburo.

Sake Sharing Ceremony- Cultural sake sharing ceremony at the wedding is called san-san- kudos which means ‘three sets of three sips of equal mine’

Honouring The Parents- Japanese wedding take some time to acknowledge the parents of bride and groom. In some wedding the couple offers bouquets of flower, a toast, personal letter of love and thanks which is the best way to honor their parents.

Speeches In The Wedding- Wedding speeches and blessings are very important. Family, friends, colleagues, teachers stand up at one point to wish the couple.

Gifts For The Guests- The bride spends huge amount of money for the gifts. Japanese chopsticks, folding fan, sake cups are just a sampling of Japanese heritage gifts that are offered to wedding guests.

Indian wedding

Vara Satkaarah- Reception of bridegroom and his kinsmen at the entrance gate of wedding hall where the officiating priests chants a few mantras and

brides mother blesses the groom with rice and trefoil and applies tilak of vermillion and turmeric powder.

Madhuparka ceremony- Reception of the bridegroom at the altar and bestowing of presents by bride's father.

Kanya Dan-The bride's father gives away his daughter to the groom amidst the chanting of sacred mantras.

Vivah-Homa-The sacred fire ceremony ascertaining all auspicious undertakings are begun in an atmosphere of purity and spirituality.

Pani Grahana-Groom takes the right hand of the bride in his left hand and accepts her as his lawfully wedded wife.

Shila Arohan-The mother of bride assists her to step on a slab and counsels her to prepare herself for a new life.

Laja Homah- Puffed rice offered as oblations into the sacred fire by the bride while keeping the palms of her hands over those of groom. Her brother pours grain into her hands saying "This grain I spill may it bring to me wellbeing and unite you to me. May Agni hear us." He asks the bride to spill the grain in fire saying "This woman Scattering Grain into the fire, prays. Blessings On my husband and may my Relatives be prosperous.

Saptapadi- Marriage knot symbolized by tying one end of the groom's scarf with bride's dress. Then they take seven steps representing nourishment, strength, prosperity, happiness, progeny, long life, harmony and understanding respectively.

Pari karma /mangal fera- The couple circles the sacred fire seven times. This aspect of the ceremony legalizes the Marriage according to the Hindu Marriage Act as well as custom.

Mangal sutra dharana- This is the tying up of a thread, which contains the marks of Vishnu or Shiva around the bride's and groom's neck.

Suhaag and Sindhoordana- The groom puts a red Powder in the bride's hair to symbolize that she is married.

Abhishek- Sprinkling of water, meditating on the sun and the pole star.

Anna Praashan- The couple makes food offering into the fire then feed a morsel of food to each other expressing mutual love and affection.

Aashirvadah- Benediction by elders.

EXCHANGING VOWS- Most culture and religions have a specific set of sacred vows that the Bride and groom are expected to Pledge each other. Even when couples write their own vows or alter the provided scripts most marriage oaths Involve promises of loyalty, respect, support and Unconditional love.

Love knows no boundaries. And once again a marriage that took place in Erode on Wednesday 27th august 2014 has turned out to be a proof for the fact that love conquered all differences including language, religion and nationalities.

The couple got married in June 2005 and now they are one of the successful couples of inter-culture marriage.

I congratulate anyone pursuing relationships that Cross religious and cultural barriers for being brave and adventurous. Its amazing how religion and One's culture can define our world and ourselves into religion of their own.

Marriages mixed by race, religion Or culture are on the rises as a Cosmopolitan spirit lends them a Tolerant climate. Of those variations, those mixed by faith are the most Challenging.

This is very interesting because different culture and different religion with unconditional love.

★Welfare

日本側参加者	安福友里恵 町田日奈子
インド側参加者	<u>Anitha Jai</u> Ayantika Saha Madhubarna Dhar Siddhesh Gooptu

WELFARE OF CHILDREN AND OLD AGED IN INDIA

In the 18th JAPAN INDIA STUDENT CONFERENCE held in Tokyo, I presented the problems faced by children and old aged people in India. As a developing country, India's economy is not as stabilized as Japan is. So the population of people below poverty line suffers the economic instability of India. The children below poverty line are not able to afford for education which is the only solution to raise the standard of family. Thus we witness 1 million out of 21 million babies born every year in India are abandoned soon after their birth due to different socio-economic reasons and a large number of children die every year due to various diseases like malnutrition and water borne diseases. Also a large number of these children are sexually abused in India. They cannot voice out their problems unless they have enough money to take legal actions. Child labor has become a very common thing that one could find small children working in petty shops and at places where it is hazardous to even adults. Also the elderly people who are above 60yrs of age suffer greatly India due to inadequate care. This problem is seen in Japan as well. In India the old aged people more often live alone without job security which leads them to poverty and death. India has the second largest elderly (60+) population in the world. Over 73% of them are illiterate and many are below poverty line. About 90% of the old people have no official security ie. Without PF, Gratuity and Pension. Many suffer from one or more chronic diseases like CHD, Cancer and HT. there are specialized hospitals and doctors for women and children, but there is very less GERIATRIC facility in India. There is only one hospital in Chennai that gives post-graduation in geriatric medicine. In spite of the various government and non-governmental organizations which work for the welfare of the abandoned children and old aged people, the problems are still persistent. The welfare organization needs to work efficiently for the well-being of all citizens in India. Thus my presentation focused on raising issues and a few solutions which can uplift the standard of Indian people.

★Natural Environment

日本側参加者	乳原晶子 鈴木盛太
インド側参加者	<u>Diana Banerjee</u> <u>Smaran Basu</u> Senthil Vel Mandharacharam

Global warming and its effects

Global warming is the observed century-scale rise in the average temperature of Earth's climate system. Since 1971, 90% of the increased energy has been stored in the oceans, mostly in the 0 to 700m region. Despite the oceans' dominant role in energy storage, the term "global warming" is also used to refer to increases in average temperature of the *air and sea at Earth's surface*. Since the early 20th century, the global air and sea surface temperature has increased about 0.8 °C (1.4 °F), with about two-thirds of the increase occurring since 1980. Each of the last three decades has been successively warmer at the Earth's surface than any preceding decade since 1850.

The effects of global warming are the environmental and social changes caused (directly or indirectly) by human emissions of greenhouse gases. There is a scientific consensus that climate change is occurring, and that human activities are the primary driver. Many impacts of climate change have already been observed, including glacier retreat. Changes in the timing of seasonal events (e.g. earlier flowering of plants), and changes in agricultural productivity.

Future effects of climate change will vary depending on climate change policies and social development. The two main policies to address climate change are reducing human greenhouse gas emissions (climate change mitigation) and adapting to the impacts of climate change.

Near-term climate change policies could significantly affect long-term climate change impacts. Stringent mitigation policies might be able to limit global warming (in 2100) to around 2 °C or below, relative to pre-industrial levels. Without mitigation, increased energy demand and extensive use of fossil fuels might lead to global warming of around 4 °C. Higher magnitudes of global warming would be more difficult to adapt to and would increase the risk of negative impacts. (Diana Banerjee)

The Effects and Prevention of Global Warming

I had my presentation on the first day; my topic and Diana's topic were interrelated so after her it was my turn. In my presentation we talked about how the rise in temperature and rise in water level is affecting the earth and us.

We also talked about the different reasons the global warming is happening and how the activities of us humans is affecting the nature. We then talked about how to prevent global warming, we talked about stopping the use of fossil fuels and using renewable sources of energy ,we talked about how changing a few of our habits can help us fight against global warming. (by Smaran Basu)

★Natural Environment

日本側参加者	乳原晶子 鈴木盛太
インド側参加者	Diana Banerjee Smaran Basu <u>Senthil Vel Mandharacharam</u>

DROUGHT

Drought is an extended period when a region receives a deficiency in its water supply, whether atmospheric, surface or ground water. A drought can last for months or years, or may be declared after as few as 15 days. Generally, this occurs when a region receives consistently below average precipitation. It can have a substantial impact on the ecosystem and agriculture of the affected region. Although droughts can persist for several years, even a short, intense drought can cause significant damage and harm to the local economy. Prolonged droughts have caused mass migrations and humanitarian crises.

Many plant species, such as those in the family Cactaceae or cacti, have adaptations such as reduced leaf area and waxy cuticles to enhance their ability to tolerate drought. Some others survive dry periods as buried seeds. Semi-permanent drought produces arid biomes such as deserts and grasslands. Most arid ecosystems have inherently low productivity.

Periods of droughts can have significant environmental, agricultural, health, economic and social consequences. The effect varies according to vulnerability. For example, subsistence farmers are more likely to migrate during drought because they do not have alternative food sources. Areas with populations that depend on as a major food source are more vulnerable to famine.

Drought can also reduce water quality, because lower water flows reduce dilution of pollutants and increase contamination of remaining water sources. Common consequences of drought include:

- Diminished crop growth or yield productions and carrying capacity for livestock
- Dust bowls, themselves a sign of erosion, which further erode the landscape

- Dust storms, when drought hits an area suffering from desertification and erosion
- Famine due to lack of water for irrigation
- Habitat damage, affecting both terrestrial and aquatic wildlife
- Hunger, drought provides too little water to support food crops.
- Malnutrition, dehydration and related diseases
- Mass migration, resulting in internal displacement and international refugees
- Reduced electricity production due to reduced water flow through hydroelectric dams. Shortages of water for industrial users
- Snake migration, which results in snakebites. Social unrest
- War over natural resources, including water and food
- Wildfires, such as Australian bushfires, are more common during times of drought and even death of people

As a drought persists, the conditions surrounding it gradually worsen and its impact on the local population gradually increases. People tend to define droughts in three main way.

1. Meteorological drought is brought about when there is a prolonged period with less than average precipitation. Meteorological drought usually precedes the other kinds of drought.

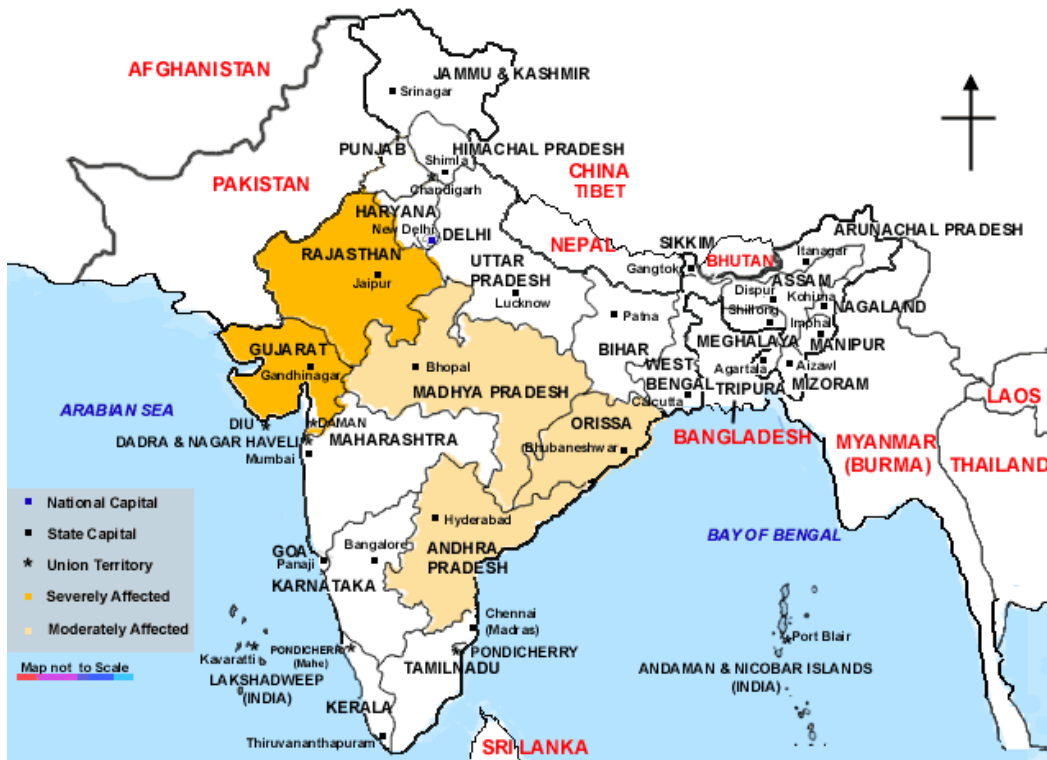
2. Agricultural droughts are droughts that affect crop production or the ecology of the range. This condition can also arise independently from any change in precipitation levels when soil conditions and erosion triggered by poorly planned agricultural endeavors cause a shortfall in water available to the crops. However, in a traditional drought, it is caused by an extended period of below average precipitation.

3. Hydrological drought is brought about when the water reserves available in sources such as aquifers, lakes and reservoirs fall below the statistical average. Hydrological drought tends to show up more slowly because it involves stored water that is used but not replenished. Like an agricultural drought, this can be triggered by more than just a loss of rainfall. For instance, Kazakhstan was recently awarded a large amount of money by the World Bank to restore water that had been diverted to other nations from the Aral Sea under Soviet rule. Similar circumstances also place their largest

lake, Balkhash, at risk of completely drying out.

Strategies for drought protection, mitigation or relief include:

- Dams - many dams and their associated reservoirs supply additional water in times of drought.
- Cloud seeding - a form of intentional weather modification to induce rainfall. Desalination - of sea water for irrigation or consumption.
- Drought monitoring - Continuous observation of rainfall levels and comparisons with current usage levels can help prevent man-made drought. For instance, analysis of water usage in Yemen has revealed that their water table (underground water level) is put at grave risk by over-use to fertilize their Khat crop. Careful monitoring of moisture levels can also help predict increased risk for wildfires, using such metrics as the Keetch-Byram Drought Index^[10] or Palmer Drought Index.
- Land use - Carefully planned crop rotation can help to minimize erosion and allow farmers to plant less water-dependent crops in drier years.
- Outdoor water-use restriction - Regulating the use of sprinklers, hoses or buckets on outdoor plants, filling pools, and other water-intensive home maintenance tasks.
- Rainwater harvesting - Collection and storage of rainwater from roofs or other suitable catchments.
- Recycled water - Former wastewater (sewage) that has been treated and purified for reuse.
- Transvasement - Building canals or redirecting rivers as massive attempts at irrigation in drought-prone areas.



Japan India relationship has been into new path because of the visit of our prime minister Narendra modi to japan months before. In japan there is often a natural disaster because of over rainfall where as in India we lack in rainfall. Several lack of farmers commit suicide because of drought. 50 percent of Indians are involved in agriculture. So japan can help us doing agriculture with your modern technology.

★Education

日本側参加者	井上咲菜 今井明
インド側参加者	<u>Aaleya Chanda</u> Ayan Mitra Rik Bhatta Nivedha Ashok Akshaya Narayanan

This presentation was aimed at an overview of the Primary Education system in India, and its advantages and disadvantages. The education system in India is divided into the public (federal, state or locally funded) and the private sectors. The medium of instruction is English, Hindi, or other state languages. India boasts of literacy rates as high as 93% (in Kerala), but conversely also sees rates as low as 63% (in Bihar). However, since the enforcement of the Right to Education (RTE) Act in 2010, the rate of enrollment has risen amongst 6 to 14 year olds.

The RTE Act provides for the right of children to free and compulsory education till completion of elementary education in a neighborhood school. It clarifies that ‘compulsory education’ means obligation of the appropriate government to provide free elementary education and ensure compulsory admission, attendance and completion of elementary education to every child in the six to fourteen age group. ‘Free’ means that no child shall be liable to pay any kind of fee or charges or expenses which may prevent him or her from pursuing and completing elementary education. It makes provisions for a non-admitted child to be admitted to an age appropriate class. It specifies the duties and responsibilities of appropriate Governments, local authority and parents in providing free and compulsory education, and sharing of financial and other responsibilities between the Central and State Governments.

The most sought after schools in the country are Private schools, with good infrastructure, modern methods of teaching, more national and international exposure o the students. However, these schools are expensive and not accessible to most of the population. Army schools across the country, with much of the same facilities, are however, only accessible to the wards of those in the army.

In a situation like this, the most affordable schools in the country are Government schools. However, more often than not, there is a lack of proper funds, infrastructure, and a dearth of teachers. The problems faced by the Indian education system is the lack of funding, shortage of teachers (of over 500,000 countrywide), when they are available, they are not qualified enough, and there are still over eight million primary school children out of school.

The problems arise from the fact that India has a growing economy that cannot yet fully support its growing young population.

Achieving complete or even near-complete literacy rates in India is a Utopian dream and so an immediate conclusion could not be reached but it was unanimously agreed that such topics need discussion and awareness.

★Education

日本側参加者	井上咲菜 今井明
インド側参加者	Aaleya Chanda Ayan Mitra <u>Rik Bhatta</u> Nivedha Ashok Akshaya Narayanan

My topic for the table discussion was on education and my presentation focused on zeal, difficulties and a case study.

In India students living in the rural areas have to cover large distances to reach their schools and sometimes it becomes a great challenge and difficulty for them as sometimes they have to cross rivers and narrow bridges and may cause a serious injury to themselves. My presentation highlighted the fact that these small children from the rural areas overcome all the difficulties and reach their schools in order to receive education. The case study was a crucial part of my presentation as it elaborated my points and improved my explanation. The case study was focused on a village and its main motive was to improve the mindsets of the people and to encourage them to send their children to attend schools. I used many pictures in my presentation to make it more interesting and to convey my message to the members. In my presentation I talked about the various resources used in to spread education such as books, videos, the internet and various pictures. The main difficulty which I spoke about was transportation as the students had to face many problems in reaching their schools.

The case study proved to be very effective as it helped the Japanese members to understand my presentation and thus the conference for me was a grand success.

★Education

日本側参加者	井上咲菜 今井明
インド側参加者	Aaleya Chanda Ayan Mitra Rik Bhatta <u>Nivedha Ashok</u> Akshaya Narayanan

Pressure in education system

Pressure in education system is a serious issue in India. Indian Education system has been facing a lot of problems for the last 3 decades and has also been increasing in a rapid rate. The pressure is becoming very difficult for the students to handle, and there are also cases of student suicides which have been reported due to the pressure. Indian students are forced to study for a lot of tests and examinations which are conducted on almost weekly, monthly, quarterly, half yearly and annual basis due to which students do not have any personal time or time to improve their extra curricular skills. There is yet another serious issue in the education system where students do not get equal education as there are privately and publicly run schools which follow different levels and patterns of syllabus, and also the focus on theory and not practice. Schools and parents these days want students to score much higher grades than the normal capacity of the students, due to which the students are made to attend extra classes in schools and coaching classes after school to score much higher marks because of which less importance is given to what is being taught to the students. Indian education system needs to consider all these to reduce the pressure and make learning more fun for children. Learning happens only when there is application of knowledge and practice of what is being taught, discussing such issues in a program like JISC has given both the Indian and Japanese students insights about problems faced in our countries and also what can be our contribution to issues like these.

★Education

日本側参加者	井上咲菜 今井明
インド側参加者	Aaleya Chanda Ayan Mitra Rik Bhatta Nivedha Ashok <u>Akshaya Narayanan</u>

EDUCATION SYSTEM IN INDIA

- Before the british rule
- After the britishers entry
- Present scenario
- Focus shifted to theory rather than practice
- Schools aiming at high scores in marks
- Pressure on students
- Declining concentration in extra-curricular activities

The Indian education system was totally different before the Britishers entered India. we had the Gurukul system which was the residential type of school, where the teachers and students often lived together in the same house. The teaching methodology was totally different. Students were groomed in such a way that they were competent in various lively martial arts. After the Britishers entry, slowly this way of education changed. Presently we follow the exam pattern, where the students are evaluated based on their scores in their exams. Because of this the students approach towards education differs. They study to fetch more scores in their exams rather than learning to be educated. Even the schools and parents are training the students to focus on scoring marks in their exams instead to learn something with practical applications. This increases pressure among the students as they are further proceeded to the next level of education or work based on their final marks. A stress is imparted on them where all the other extra-curricular activities are given less priorities when it comes to scoring marks. Still modifications in the education system is happening from year to year. and some schools are trying to bring out practical learning rather than theory as a result of analysis in the education structure and for the students development.

フィールドワーク報告

10月8日

福祉班：ちょうふ若者サポートステーション

環境班：日本未来科学館、TOYOTA MEGAWEB

教育班：ベネッセコーポレーション

14:00	ちょうふ若者サポートステーションにてディスカッション 終了
16:30	



★目的

厚生労働省の委託事業を行う認定 NPO 法人への理解を通じて、日本の若者が雇用で抱える問題について考える。働きたくても働けないという状況にあるいわゆるニートと呼ばれる若年無業者に、カウンセリングやセミナー、職業体験の場の提供などを通じて、就職支援を行う NPO 法人である。また、雇用におけるインドとの違いについて理解を深める。

★概要

まず、日本の雇用が抱える問題についてお話しいただいた。その後、サポートステーションに関する NHK の番組を鑑賞した。そのビデオでは以前働いていた職場でお客さんから辛い言葉をかけられたことをきっかけに働くことに自信を失って、働くことをやめてしまっていた青年が、サポートステーションによって働く自信と喜びを得た過程に迫っていた。その後、日本とインドでどのように雇用形態、労働問題、家族・地域のあり方が違うかを話し合った。

★感想

辛い言葉をかけられたことをきっかけに仕事をする自信を失ったというエピソードに共感する私達日本人に対し、家族に相談すればいいのに、とのインド人メンバーの発言が印象的だった。インドでは日本よりも家族や親族の結びつきが強固であることを知り心理的なサポート体制が自然と整っているのかなと思った。家族や地域のあり方の違いは雇用だけでなく様々な福祉のあり方の違いに関わっている様に映り、とても興味深く感じた。

11:00	お台場へ出発
12:00	昼食
13:00~15:00	TOYOTA MEGA WEB
15:00~17:00	日本科学未来館 (Miraikan)



★目的

全ての国の人が共通に直面する問題である環境問題について、インドと日本の異なる立場から考える。分科会を通じた議論だけではなく、実際に五感で感じることによって、より日本が抱える問題点やインドとの共通点、相違点について考えるきっかけとする。

★概要

・MEGA WEB ...日本を代表する自動車メーカートヨタについての展示がされている。歴史的な自動車が年代別に展示される。シティショーケース、ヒストリーガレージなど、最新鋭の水素自動車の展示されるショールームから、自動車の歴史をさが登れるミュージアムまでと幅広い。

・日本科学未来館...科学技術について幅広い展示がある。特に、日本や世界の気候変動についてやエネルギー問題についての展示を中心に見た。

★感想

環境というテーマということで、フィールドワークを行う場所を決める際、苦戦したが結果的にはインド学生から想像以上の反響があり、大変有意義な時間を過ごすことができた。ディスカッションやプレゼンテーションをするだけでは分からない問題点や新たなインドと日本の比較や疑問が生まれた。

全体として、廃棄ガスによる大気汚染が問題となるインドで暮らす学生たちにとっては、環境配慮を考え、開発を続けていく日本の最先端の技術に感銘を受けたようだった。特に日本の自動車については班のメンバー全員の関心が非常に高く、そのことについて焦点を絞ったディスカッションを行っても面白かったかも知れない。

11:00	企業見学(ベネッセコーポレーション)
11:30	ベネッセコーポレーションの方からの企業説明
12:00	ベネッセコーポレーションの社員の方も含めてのディスカッション
13:00	最後に記念撮影



★目的:インドにおいて小中高校生を対象にした通信教育やEラーニングあまりないので、通信教育が広がれば識字率や教育の質の格差などの教育の問題を解決できるかもしれないと考えた。そこで通信教育大手のベネッセコーポレーションの方から通信教育について話を伺い、インドの教育の未来を模索しようとした。

★概要


まずベネッセコーポレーションの東京本部を社員の方に案内していただいた。社員の方々が和やかに会議をしている光景がよく見られた。また同社では女性の社員の方が多いそうで専用の育児所もあった。

次に社員の方からベネッセコーポレーションの概要と事業の説明を受けた。インド側のメンバーは通信教育の教材やマスコットキャラクターのぬいぐるみなどのベネッセの商品に興味津々であり、質問を交えながら熱心に説明を聞いていた。

説明を受けた後に各メンバーは事前に準備しておいたインドの小中高校教育における問題点についてのプレゼンテーションを行った。そこでは教育インフラの不足、全体的に教師の質が低いこと、私立学校と公立学校の格差などがあげられた。そしてこれらの問題点が同社のサービスによって解決できるかをディスカッションした。議論は大変白熱したものとなった。

★感想

インド側の学生は通信教育について興味を抱いており、フィールドワーク先の選定はよかったと思う。ディスカッションが白熱しすぎて話についていくのがやっとなるときもあったがインドの教育の未来を感じとることが出来た。

A traditional Indian thali meal is presented on a large, round, polished metal plate. The central focus is a large, golden-brown, slightly charred flatbread, likely a roti or chapati, which is folded and placed over several smaller bowls. Surrounding the flatbread are several small, round metal bowls containing a variety of dishes: a bowl of white yogurt with a red chili and spices, a bowl of red chutney or sauce, a bowl of yellowish-orange chutney, a bowl of red chutney, a bowl of yellowish-orange chutney, and a bowl of red chutney. The overall appearance is that of a rich and diverse meal. The text is overlaid in the center of the image.

《文化交流プログラム報告》

文化交流プログラムは主に2回にわたって行われた。
順番に文化交流プログラムについて、振り返っていく。

①文化交流会

10月4日の開会式の直後に、以下のような形式で文化交流を行った。

①日本からの発表

(AKB48の「フォーチュンクッキー」の踊りを動画で組み合わせたムービー)

②インド・コルカタからの踊りと歌の発表

③インド・チェンナイからの踊りの発表

④日本舞踊の方たちの披露

《コルカタからの発表》

男女混合で、
ハーモニーの美しい合唱を披露してく
れた。インドのきれいなメロディーで
あった。ちなみに、Ayanは駅のホーム
でも甘い歌声を披露してくれた。



皆で服を赤に統一して、力強い踊
りを披露してくれた。
特に、Rikのアクロバットな踊り
に一同驚いた。

《チェンナイからの発表》

AnithaとNivedhaがインドの伝統的な
舞踊をみせてくれた。アップテンポのメ
ロディーで会場が手拍子で盛り上がり、
ふたりのセクシーで魅力的なダンスが
会場を魅了した。





《日本舞踊》

「アマチャの会」の方々に日本舞踊を披露していただいた。

古典、錢太鼓、南京玉すだれと3つの演目を披露して頂き、インド側メンバーだけではなく、日本側メンバーも観たことのなかった日本文化を堪能することができた。

左写真は、「南京玉すだれ」という演目である。

②着物着付け体験

10月9日夕方に、北爪様のご厚意で、インド人女子メンバーに着物の着付けを体験してもらうことができた。当初予定していなかったが、インド人男子メンバーには我々が浴衣を購入し羽織ってもらい、日本人女子メンバーはサリーを急遽着させてもらった。結果的に、日本とインドの伝統衣装の文化交流を行うことができた。

右写真は、サリーを着て、アイメイクもインド仕様になった日本人メンバー。

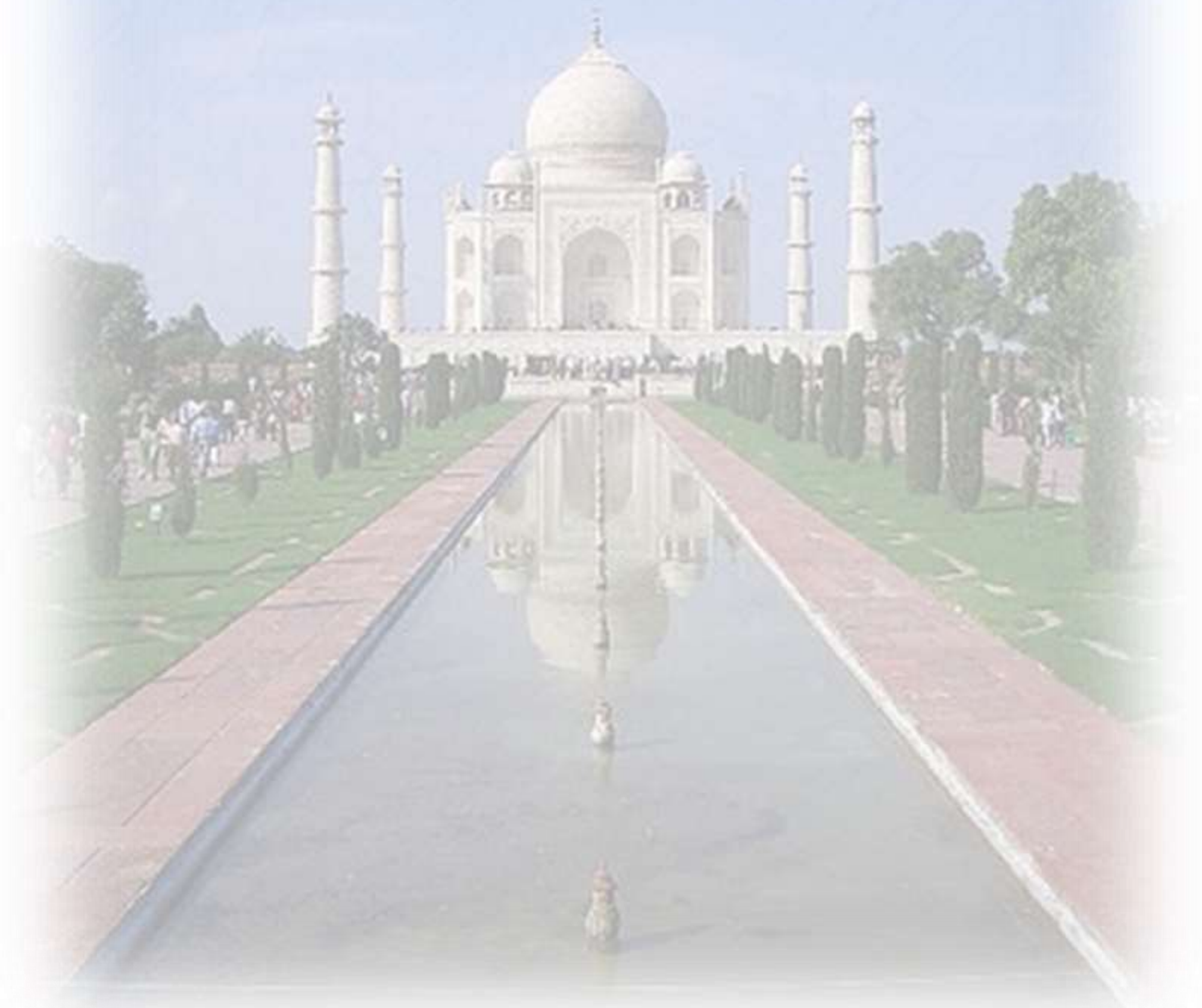
下写真は、集合写真である。



《参加証》



《特別コラム》



帰国後のインド人学生にアンケート！！

- ① 本会議中一番印象的だったイベントは？
- ② 日本で買ったお土産で気に入っているものは？
- ③ 日本で驚いたことは？
- ④ 日本人ってどんな印象？

- ① Even though I loved all the events, the one I loved the most was the camping! The log cabins were so amazing and it was really nice to be able to stay with everyone.
- ② I love the clothes I bought at Harajuku. But if I have to pick a souvenir then it would be the Daruma doll I bought.
- ③ I was surprised by the technology.
- ④ I thought everyone in Tokyo was well dressed! And everywhere we went during our stay people were so interested in learning about our country. They were very warm and welcoming.

Aaleya





- ① Camping
- ② Chocolate
- ③ Everyone was following the rules!
- ④ Very helpful!

Ishan

- ① River side camping
- ② Japanese Sake
- ③ Cleanliness, punctuality, and peace
- ④ Hospitality is super.

Senthil



- ① For me harajuku and shibuya was the most impressive part and eating tempura at Sky Tree.
- ② I loved the bonsai sake and some accessories that I got.
- ③ I was surprised as to how everyone could keep up time and be punctual all the time.
- ④ Japanese people are the most sweetest people you can ever meet. And I'm sure they will be your friends for life.

Nivedha



- ① Going to country side and host house.
- ② Chocolates
- ③ Almost everything. People's humble attitude, common umbrella, ofuro, dustbins, etc.
- ④ Amazing people. Very humble, respectful, kind and so sincere

Anitha



- ① The best part of my experience is the culture exchange
- ② I like those hand fans and small fancy purses
- ③ I was really surprised when I heard there is no fear of robbery in Japan
- ④ On the whole Japanese people are amazing in their hospitality and technology

Akshaya

- ① Fieldwork
- ② Clothes and chocolates. I dint buy anything else.
- ③ I was surprised by the level of technology and development in the country. It was amazing.
- ④ People in Japan are very kind, caring, humble and hospitable.

Rik





① The visit to the high school was the best

② The wind chime and the sensu

③ No, it was everything imagined it to be

④ They are very kind, nice helpful, hardworking, punctual, and I love their sense of hospitality

Mdhubarna

① The event that impressed me was not only one..... I was lucky enough because I got many new friends like you all. You all took too much care of us. That impressed me a lot. I really enjoyed the stay in the countryside. The performances in the opening ceremony. There is everything that impressed me at every step I spent in Japan.

② I bought a lot of things for Japan and I liked everything I bought.

③ Surprising or not but I was impressed by everything.....

④ The Japanese people are every nice, polite. They are very good. Each and every people who even don't know us greeted us everyday in NYC. The roads of Japan are very clean. The transport system there is well managed. The Japanese people are very much punctual. whom I met there..

Ayantika



★ランキング★

【一番印象的だったイベント】

- 1位 キャンプ ● ● ●
- 2位 渋谷・原宿観光
- 3位 着物の着付け体験

かわいいログハウスでの共同生活がみんな気に入ったようです♡カワイイものが安く買える原宿もいい勝負！

「明治」にこだわりがあるようです笑 みんな甘いものが大好きなんですね～

【好きな日本のお土産】

- 1位 (明治の)チョコレート
- 2位 扇子
- 3位 洋服

【日本で驚いたこと】

- 1位 時間や秩序を守る
- 2位 治安が良い
- 3位 技術力の高さ

これが1位ということは....逆にインド人は時間をあまり気にしないということですね笑

お・も・て・な・し。これは日本人が世界に誇る歓待の精神でしょう。意識していたこともあり、私たちから感じとってもらえて嬉しいです！

【日本人の印象】

- 1位 ホスピタリティー
- 2位 優しい、親切
- 3位 誠実、よく働く



《写真集》

10月3日 出迎え



チェンナイチームの空港で出迎え。これからの10日間に心が躍ります!!

10月4日 開会式



工芸室にてオリエンテーション



コルカタチームの出迎え



オリセン生活のためにみんなで準備



早くもハロウィンを楽しむ他団体とパチリ



開会式へ出発!!初めての電車に興奮!!



電車に乗るだけでも嬉しそう♪



素敵な本のプレゼント



開会式。長浜先生が素敵な文字を書いて下さいました



歌にダンスに盛り沢山の文化交流



来賓の方々にはカンボジア、中国、インド、日本のお茶を振る舞いました

10月5日～10月7日 キャンプ



ログハウスで3日間の共同生活の始まり



雨の中の買い出しはもはやビッグイベントに！



リバーサイドで女子トーク♡



女子力を発揮した成果を見て下さい！！



運良く夜のうちに台風が過ぎ去り散策へ!!
気持ち良い！



お好み焼き作りに初挑戦！

10月7日 高校訪問



手巻き寿司、たこ焼き、タンドリーチキン
...! おいしそう...!



高校生と一緒にディスカッション



高校生達も英語への意欲が湧いたようで何より!



夜には花火をしました。線香花火の良さ、伝わったかな...?



茶道体験。正座はツライ...!

10月8日 フィールドワーク



環境班：MEGAWEB トヨタショールーム



福祉班：ちょうふ若者サポートステーション



初めてのラーメンにご満悦



インド人ワーカーとお食事会



教育班：ペネッセ企業訪問

10月9日 幼稚園訪問



ねむい~zzz 長距離移動が続きお疲れの様子



幼稚幼稚園の椅子は小さかった...。



電車の長旅もあつという間



子供たちとすぐに仲良しに♪



空いた時間に新宿で少し観光♪



本気で尻尾取りゲームに挑んだ結果！



着物の着付け体験



サリーと着物で豪華に☆



素敵！よく似合ってます！



北爪様のセンスでどんどん大和撫子へ...♡



男子も張り切っています笑



こちらもインディアンガールへ...♡



皆の注目を浴びて緊張...!



ハチ公の前で



世界で一番忙しい、スクランブル交差点に大興奮...!



オリンピックセンターの食堂で



17期JISCメンバーとの久しぶりの再会...!



短い時間を少しでも一緒に過ごそうと、部屋でパーティーを開催!

10月11日 浅草、東京スカイツリー観光



運良く力士の方と一緒に撮るチャンスが！！

10月12日 東京、秋葉原観光



車掌さん気分♪



イケメン三人組♡



ついに念願の新幹線と！



おみくじ何がでるかな～？



初めてのプリクラにテンションが上がります！



スカイツリーと一緒に！

10月13日 原宿観光



夜の秋葉原。皆お望みのものは買えたかな？



3回目の竹下通り笑 みんなショッピングが大好きです



居酒屋体験。これも日本の文化の一つですね



ダイソーはとっても人気！



Anitha の誕生日を皆でお祝い！！



甘い物好きのインド人にとってクレープはまさにツボ！

10月14日 在日インド大使館 表敬訪問



エントランスではガネーシャがお出迎え

閉会式



漢字で書かれた自分の名前に大喜び！！



ワドワ大使のお部屋のテラスにて



参加証を頂いて一言！



タミル地方の同じ故郷同士、話が盛り上がるようです



最終日のためにこんなに沢山のお土産を用意してくれました



夜はさよならパーティー！
明日帰ってしまう実感が全
くわきません...



華やかなドレスが映えますね～



インドファミリー♪



10月15日見送り



コルカタ組は羽田空港、チ
ェンナイ・コヤンバトル
組は成田空港でお別れです

やっぱり別れはツライ...
自然と涙があふれてきます泣



必ずまた会おうと約束しました。次はインドで...！！
素敵な10日間をありがとう！！

番外編 (みなさまお疲れさまでした!!)



夜な夜なサプライズプレゼントを作成する女子陣。皆が喜んでくれて何より



ミーティングも今では良い思い出...



出迎えへ向けて JISC の看板作り♪



記念すべき日本開催の旗も作りました

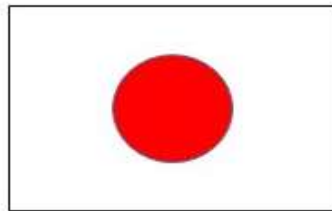


やっとできた...!!!愛すべきインドの親友たちへ、スクラップブックのプレゼント♡

<第四部>

個人語録

《実行委員個人エッセイ》



私になり、この18回目日本インド学生会議を振り返ろうと、以下のように2部構成にしてみました。お時間があるときに、お読みいただければ幸いです。

◎メンバーへの感謝の巻

メンバーをはじめ、長浜先生や協力してくれた方々にご迷惑をおかけしてばかりで、反省しなければいけないことは尽きないのですが、本当に5人のメンバー全員が様々なところで力を発揮してくれ、奮闘しれくて、ちょっとした喧嘩も含めてとっても楽しい本会議を終えることができました。謝らなければならないことはたくさんあるけれど、感謝の気持ちが大きいので、ここでひとりひとりにお礼を述べたいなと思います(笑)

「いつも正しくあろうとした、財務の」もりた

→委員長がちょっと大雑把で、副委員長のもりたがきちっとして…個人的にバランスがとれていたのではないかと思います。財務の仕事はきつとつらく胃が痛かったことも多かったらうと思いますが、最後まできちっとやってくれて、いつも報連相を徹底してくれて、頼もしかったです。本当に感謝しています。ありがとう!!

「頭をかく癖のある」さんにい

→わからないことや疑問に思ったことはすぐに共有して、どんどん仕事を進めていってくれる姿勢に助かりました。話しやすい人柄をしていて、いい意味でマイペースで、全体の緩衝材になってくれたのではないかと思います。ありがとう!!

「私の中で徹夜ガールのイメージが付いてしまった」さきな

→いちばん仕事量が多かったんじゃないかってくらいなのに、ひとりでこなしていく姿にでき女の香りを感じました。お母さんみたいにあれもこれもやってくれる面もあるのに、人一倍きゃぴきゃぴ楽しんでいて、そのバイタリティに驚きました。ありがとう!!

「意外と人間くさい」ゆり

→もっとタンパクな感じかと思っていたら、変なモノマネしたり色んなことに付き合ってくれたり…たくさん楽しませてもらいました。ズバズバ言ってくれる割に、あまりにも優しいので、甘えてばかりだったような気がします。とにかくありがとう!!

「常に動き続けて、オリセン部屋を綺麗にしてくれて感謝な」ばいちゃん

→本当に仕事の速さが尋常じゃないし、細いのにぺろりとたいらげて、でもまたすぐお腹空くし…私は出不精なタイプなのでちょこまか動く姿を見ていて飽きなかったです笑。斬新なアイディアもすぐ思いついてくれ、合間合間にそのアイディアを実践して皆を楽しませてくれました。ありがとう!!

最後に、長浜先生に。

多大なご迷惑とともに、ご多忙の中、一から十までご指導を頂いて誠に感謝しています。貴重な機会やステキな出合いを数多く提供して頂きました。長浜先生なしでの本会議はありえませんでした。学生団体としてもっと自立して運営できるように、引継ぎに力を入れていきたいと思っております。が、これからもどうぞご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。

また、18期全体の反省もここで述べておきたいと思います。

「ホスト」という意識を持ちすぎて、メンバーひとりひとりが抱え込みすぎたのかなという思いがあります。もっとインド側メンバーに協力を求めたり、任せたりして、対等な関係を形作るようにすれば更に素晴らしいものになっていたと思います。「いつも忙しそうだね」とか「わたしも手伝うから！」と言われないような関係作りを努力できればよかったです。皆が初めてで、準備期間も短く、俯瞰して考える余裕がなかったから仕方がない部分もありますが、是非次の本会議の際にはこの反省を活かしていただきたいと思っています。

◎誓いの巻

以上の感謝の気持ちと反省から、ここに宣言をしておきたいと思います。

①JISCの発展を願って、OBとして全力で協力する。

情報不足で苦労したので、引継ぎはちゃんとしていこうと思っています。具体的にはワンドライブの整理や、引継書類の作成、手渡し、連絡しやすい環境づくりに取り組みたいな…と。縦のつながりが深い団体にしていければと思います。

②必ずインドに行くし、彼・彼女らに会いに行く

わたしは二度インドを訪れたことがあります。今回の活動を通してもっとインドのことを知りたくなったし、彼らに会いに訪れたいと強く思いました。今度は旅行ではなく「友達に会いに行く」と言って訪れることがとても楽しみです。

日本インド学生会議への感謝と、今後の繁栄を祈って！！



正直に言うと、JISCに入るまで私はインドにまったく興味がなかった。

おそらく JISC に入っていなければ生涯インドに行きたいと思うこともなかっただろうし、インド人と交流したいと思うこともなかったであろう。

私が JISC に入ろうと思った理由は、「自分の大学以外の人たちと一緒に何かをやってみたい」、「国際交流をしてみたい」という漠然とした理由だけであった。

しかし、最近にして何気ない日常の中でふとインドを探し、求めている自分がある。結論から言うと、私はインドにハマったのである。

JISC とインドに関わって、思うことや学ぶことは沢山あった。それは想像をはるかに超えるものもあったし、理解できないこともあった。だがそのすべてをこの場で語ることはできないので、今回は少し焦点を絞って話したいと思う。それは人との交流である。そもそもこの JISC というのは、インドへの興味という共通項のみを持ち合わせた人たちの集まりであり、目的、学年、これまでの人生の経歴も違う。大げさに言えば、違う国の人たちが集まって何かをしようと言っているようなものである。そうなれば、価値観も考え方も違うため一つのことを行うことは難しくなってくる。しかし、こうした困難な状況の中でもその違う国の人たちと深く話し合い、お互いを理解し合うことが出来れば同じ国の人同士の集まりよりも大きなことを成し遂げることができると思う。だが私は、そのすべてを受け入れることができなかった。島国根性であったのだ。そのため国内の外国人たちと本当の交流ができなかったのである。国内交流ができない者は必然的に真の国際交流もできていないであろう。他人の考えを受け入れることの難しさ、真の相互理解とはとてつもなく難しいことなのだと思います。

しかし反省ばかりではない。この一年を通して学んだこと、また助けてもらったことも多かった。それはインドメンバーに対しても同様であり、考え方、知識の広さ、コミュニケーション能力の高さなどには大変驚かされた。そして自分の無知さが恥ずかしくなった。今期は日本開催であったことより、どうしても主催国として運営に追われることが多かったため本会議を楽しむ片手間、仕事を意識しなくてはいけない場面が多かった。しかし主催側の人数が少なかったのにも関わらず無事に本会議を終えることができたのは、その外国人達の助けに他ならない。そうしたことを学べたのも、この活動の魅力の一つであり、インド開催とは違うところである。

他国の良い点、悪い点、そして自国の良い点、悪い点をお互いに腹を割って見せ合うことで初めて見えてくるものがあるということ、そして自国にとって都合の良いことばかりを言っているだけでは国際交流にならないということを学んだ。

私はこの先の人生でも、きっと多くの外国人と出会い国際交流をする場面があると思う。そうした出会いを大事にし、他国をもっと受け入れると共に今までの出会いも大切にしていきたい。またこのような素晴らしい経験をさせて頂いた当団体には感謝しきれない。

最後になるが、お世話になった長浜先生をはじめ、関係者様、財務局長として大変お世話になった財団の皆さま、初めから温かく迎え入れてくださった松岡環先生をはじめとするインド通信の皆さま、OB・OGの皆さま、また18期のみんなに深く深く御礼申し上げたい。



初めて JISC を知ったのは 1 年前の 11 月だ。17 期の友人が、インドで行われた本会議の報告会の宣伝をしているのをフェイスブックで見た。私は、高校生の時訪れたインドへの衝撃が忘れられず、「またインドに行きたい！」という思いがずっと心にあった。そしてこの会議に参加すればインドに行けるのではないかと思い、とりあえず報告会に行ってみることにした。

報告会で見た 17 期 JISC のインドでの一ヶ月にわたる本会議はとても楽しそうで、私にも魅力的に映った。しかし、私のインドに行きたいという願いは裏切られた。今年は日本開催だということである。正直、がっかりした。インドに行けないなら、入る意味無いかな…。そう思ったとき、JISC が様々な方・団体の支援を受けながら、学生の力で準備を行い、本会議に真剣に臨むことを知った。驚いた。学生の分際で、ここまで色々とやらせてもらえることに、好奇心がわいた。そこで私は、「インドに行けなくても面白いかも！」と考えを変え、団体に入ることを決めた。

しかしその後の道のりは想像よりずっと険しかった。他のメンバーが中々集まらず、本会議の内容を決めることもできず、ただ日々が過ぎていく。現実的に、今年は無理なんじゃないかと思ったこともある。だから 6 月に 4 人メンバーが加入した時、本当に嬉しかった。しかし喜ぶ間もなく、急ピッチに準備を進める必要があった。それからの四か月は色々なことがぎりぎりで、自分自身も余裕がなく、様々な人にご迷惑をおかけした。しかしとても勉強になったのも事実だ。大雑把に生きてきた私には、丁寧に物事を進めることの重要性和大変さを初めて体感したように思う。

そうこうしているうちにあと 1 週間、あと 3 日、あと 1 日…と本会議が迫ってきたが、それでも全く実感がなかった。やっと計画と準備が終わり、良かった間に合った！という感じだったからだろう。英語の勉強もほとんどできていなかったのが実情だ。

そして本会議。結論から述べて、日本開催は、とても刺激的だった。それは私の想像を遥か超えるものだった。毎日が充実しており、予期しないことの連続で、純粋に楽しかった。その楽しさは、ゲームをしたりふざけあったり、そういったこととは少し違うものだと思う。

まず、彼らと一緒に過ごして、お互いの違いと、共通点がそれぞれ浮かび上がる中で、世界の広さと同時に近さを感じた。衣食住を初めとした、時間感覚、自己主張の仕方等の違い。と同時に、誰かを思いやる、家族を大切にするといった共通点。自分が普段当たり前に入れていることが決して当たり前ではないことに気づかされ、世界の広さを感じつつ、遠いようで近いような気もした。中高大と似たような人とふれあってきた私にとって、その感覚はとても不思議で、刺激的だった。

それから、出身地域で言語が違うインド人メンバーを見ていると、日本がとても一様な国にも思えるが、それは日本の中にある多様性に自分自身が目を向けていないだけなのではないか、とふと思った。いつも自分と似たような人々というせいで、排他的になっているのではないか。インドという自分とは全く違う環境で育っていても、通ずるものがあることを知り、私は、もっと色々な人に目を向け、その多様性を認めながら、自分の世界を広げようと思った。義務感というよりは、純粹に、その楽しさを知ったからである。

そして、インドという国に改めて魅力を感じた。彼らが入れてくれたチャイ、見せてくれ民族衣装、アクセサリ、聴かせてくれた音楽、何よりも彼らの温かさ…。ああ、やっぱりインドに行きたい！と思った。卒業旅行はインドと心に決めている。

こうして振り返って思うのは、あの時、JISCに入ってから私の人生は確実に豊かになったということだ。私は自分がいかに狭い世界で、狭い視野で生きてきたかを思い知ったし、自分とは全く違う人達と関わることの楽しさを知った。色々と大変なことも多かったが、それも含めて、このような素晴らしい経験ができたことを本当に嬉しく思う。

そして、このような経験は様々な方の支えの中で実現したものであり、決して自分一人ではできませんでした。準備段階からお世話になった長浜先生、JISCに導いてくれた友人、OB・OGの方々、本会議を一緒に作り上げた18期メンバー、そしてJISCを支えて下さっているすべての方々に深く感謝致します。本当に有り難うございました。



大学二年の夏休み、友人たちと一週間インドを旅行してから私は自然とインドに夢中になっていた。これまで 20 数か国を旅してきたが、これほど強烈に印象に残っている国はインドが最初で最後かもしれない。様々な民族と宗教が併存する混沌とした雰囲気、鳴り響くクラクションの音、道の真ん中を堂々と歩く牛たち、人々から感じる生きるエネルギー…。神秘の国インドを知るには、たった一週間の旅行ではとてもとても短すぎた。もっとインドについて知りたい！インド人と交流を深めたい！という思いがこの日本インド学生会議に入る一番大きなきっかけとなった。

18 期は動き出しが遅れ、しかもメンバーが 6 人だったこともあり、準備期間から本会議にかけて、「超」がつくほど多忙な日々であった。本年度は日本開催の年。ゼロから本会議を作り上げていく機会を与えていただいたからには、インドの学生たちには最高の 10 日間を過ごしてほしいと、そのためには決して妥協したくないという熱意があった。本会議中も気がつけば夜が明けていたことが何度もあったし、正直ツライことも多々あった。しかし、だからこそ終わってみて今まで味わったこのない達成感が得られたのだと思う。大げさではなく、今までの人生を振り返ってもこれほどに濃く、楽しく、充実した 10 日間で走り抜けたことはなかった。大学生生活最後の年にこんなに貴重な経験をすることができて、本当に幸せである。この報告書の作成を期に、本会議中の出来着を一つ一つ思い出しながら、改めてそう思う。

空港でインドの学生たちと対面するまで、正直インド人と深く交流する機会はほとんどなかった。これからやって来るのはどんな人たちなのだろう、これから 10 日間どう関わっていけばよいのだろう、と不安や期待が入り混じった感情を抑えながら、準備を進めていた。しかし本会議が始まり、インドの学生たちと対面した途端そんなものは完全に忘れ去っていた。むしろ一分一秒長く一緒にいたい！一緒に話していたい！という気持ちに変わっていたのだ。気づけば一週間分の荷物をスーツケースに詰め込み、彼らと毎日オリンピックセンターに泊まっていた。それほどに 12 人のインドの学生たちは皆、個性豊かで何よりも温かかった。分科会や観光など、スケジュール上のイベントはもちろん、夕食後一緒に大浴場に入り、寝る前に皆で集まって分科会では話しつくせなかったことを語り合うのが何より楽しかったし、勉強にもなった。ファッションや芸能、恋愛、他愛もない話で盛り上がり騒いでいると、インドの学生も日本の学生も同じだな、と思えた。同時に、彼らと一緒に生活する中で、私たちとの違いを認識する場面にもたくさん出会った。最初に意識したのが家族のあり方。年の近い彼らが、滞在中しきりに親兄弟と連絡を取り合い、物事を決める際に親の意見を非常に尊重する姿は、新鮮でもありとても微笑ましかった。インド人にとって、生活の中における家族の存在はとても大きいようで、家族への深い愛情を感じた。それから、感覚の違いも印象的だった。一緒に生活をする上で、彼らとのコミュニケーションには想像

以上に強い主張が求められた。私はもともと人前で話したり、自分の意見を強く主張することがあまり得意ではない。しかし不思議なことに、分科会や何気ない会話の中で、自然と声を大にして英語で指示を出し、素直に疑問をぶつけ、反論までしている自分に気づき少し驚いたほどである。日々の予定を円滑にこなすためには、ある意味必然だったともいえるが、納得するまでとことん議論する彼らの姿勢から受けた影響も大きかったのだろう。これはあくまで多くの発見の一つに過ぎないが、私たちとの違いに触れる度に、逆に普段意識していなかった自分の行動や、日本というものについて考えさせられ、大きな刺激を受けた。

振り返ってみると、本当にあれはたったの10日間の出来事だったのか、と思うほど多くの事が目まぐるしく起こり、多くを学び感じる日々だった。その全てに対する思いはここではとても書き尽くせない。しかし何より一番に言えるのは、本会議を通して前よりもっとインドが好きになったということ。それは、純粹で優しく面白くて...その魅力を挙げればきりが無いほど素敵なインドの親友たちと出会えたからに他ならない。どこに行こうか思索していた卒業旅行も、本会議が終わるころには、何の迷いもなくコルカタ・チェンナイ・コヤンバトールを周遊することに決まっていたし、2年後ニベダ（コヤンバトールの学生）の結婚式に出席することも約束してある。また、4月から社会人となるが、何らかの形で仕事でもインドと関わられるようなことがしたい、と思うようにもなった。この学生会議の存在を知り、入っていなかったら、今の生活もこれからの生活も全く違うものになっていたのだろうと思うと、不思議な気持ちになる...。なにはともあれ、今はあの憧れの地インドで大好きな親友たちと再会できる日がとても待ち遠しい。

こんなに素晴らしい経験をさせていただくことができたのも、多くの方々によるご協力、お力添えがあったからこそです。様々な場面で、多くの方の温かさ、優しさを身に染みて感じました。私たちの活動を支えてくださった全ての方々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。そして一緒に本会議を作り上げ、成功に導いた実行委員のメンバー、本当にお疲れ様。そしてありがとう。



おかげさまで日本インド学生会議も今年で18年目を迎える。この団体の活動やメンバーの個性は期によって異なると創設者の長浜先生から話を伺ったことがある。そしてこの活動報告書を手にとっていただいている方の多くが18期の活動やメンバーの考えを気になっているのだと思う。この報告書を読めば18期の活動がわかると思う。そこでこのページでは18期の活動を通して私が感じたことをまとめていく。

まずこの半年の活動を振り返って思ったことは大変貴重な経験を得たことだ。学生会議への参加は学生のうちしかできないことだし、この団体の理念にもあるように利害関係のない学生同士だからこそ、このような交流ができた。

ここからはこの半年間の活動を振り返っていこうと思う。

英語で海外の大学生と交流してみたいという気持ちと今後日本を超える経済発展が予想され英語が公用語であるインドという国への興味から、この団体に参加した。ただインドの知識が豊富というわけでもインドに行ったこともなかった。

18期が正式に発足したのは6月であり、私もその時期に正式にJISCに参加した。これは例年と比べると遅く、今年は仕事の多い日本開催の年であり人数も少ないことからメンバーは全体的に忙しかった。特に財政や国際渉外局は非常に大変であったと思う。お疲れ様です。やはり人数不足を痛感した。これを読んでいる来期以降の方はリクルート本当に頑張ってください。

私は学術局でインドの知識についての勉強会を開催したり、メンバーが多忙で実際は出来なかったがプレゼンテーション大会の企画をしたりした。また観光企画や参加証の準備や財務のお手伝いも行った。

本会議の準備や勉強会を行うにつれてインドへの興味が強くなっていった。しかし今年は日本開催なのでインドに行くことはない…。そんなことを考えていたとき財務の鈴木君と一緒にインドへ行こうと誘ってくれた。今思えば、初めて会ってから2か月ぐらいのひとりでよくインドへ行こうと思ったものだ。鈴木君ありがとう。そして2人で(もちろん自費で)インドに行った。ガイドもつけずに2人で行ったので多少のトラブルにも遭ったが、非常に楽しかった。またその時にコルカタ地方に住んでいるインド側のメンバーとも会えた。インド側のメンバーは私たちにとても親切で、私は彼らが日本に来るときはたくさんのおもてなしをしようと決意し、帰国後も本会議の準備に打ち込んだ。

本会議開催後は本当にあつという間であった。開催式の次の日からのキャンプによってインド側メンバーとの距離を一気に近づけることができたと思う。幼稚園訪問ではインド側メンバーと幼稚園生と一緒に無邪気に遊び、紙芝居や日本の遊びを紹介した。フィールドワークでは分科会の理解を深めるとともに企業の方と貴重な話が出来た。観光では十分にインド側メンバーをおもてなしでき、インド側メンバーに満足してもらって嬉しかった。

分科会を通してインド側メンバーのプレゼンテーションが上手だと感じた。全力で自分の意見しっかりと相手に伝えようとしていた。私もその姿勢を見習い、拙い英語ながらも自分の意見をつたえることが出来たと思う。このことで分科会のテーマについての理解が深まった。インド側メンバーはメリハリがしっかりしていて観光や文化流会ではとても楽しむ一方、分科会には真面目に打ち込んでいた。

本会議は大変充実したものとなり準備した甲斐があった。本会議後もメンバーと交流を続けていきたい。最後にインド側も含めた 18 期メンバーや OBOG の方々、長浜先生、近藤先生、JISC を協力してくださった方々、本当にありがとうございました。



インドとの出会いは、大学2年生の夏休みだった。高校時代から世界史が好きで一度行ってみたいと思っていた念願が叶っての観光旅行。しかし、行けると決まってから、衛生状態、治安、予防注射…色々な不安が過ぎり、必死になってできる限りの準備をし、緊張しながら臨んだ。インドに到着してからの衝撃は忘れられない。野生動物が街を行き交い、車線はないに等しく、何種類もの宗教が混在し、一步進むごとに誰かに騙されそうになる…とんでもなく無秩序で、世界のどの場所とも違っていると確信した。ルール通りに秩序立って物事が進んで行く日本とは、まるで違った。一週間の滞在中、毎日驚きの連続だった。

しかし、帰って少し経つと、不思議とインドへもう一度行きたいという思いが湧きでてきた。ひとときわ刺激の強い旅行だけだったに、インドという国への思い入れは私にとって特別なものとなったのだ。そして、2年後大学4年生になり、偶然JISCの存在を知った。日本開催のため、残念ながらインドに行く機会は持てないが、あのインドの人達が日本でどんな反応をするのか好奇心が湧き、また、学生最後の年に何か一つやり遂げてみたいと思いついて参加することに決めた。

実際にJISC入ってみると、同期メンバーがとても少ない中、自分たちで全てを一から作り上げなければいけないという予想外の困難にぶち当たった。学生会議としての義務を全うしながらも、折角インドから来る学生が1日も無駄にせず楽しめるようにと、頭をひねる日々だった。日本とは異なる感覚を持つインド人とのメールやネット上だけでのやりとりにも苦労した。

会議が始まる直前からは本当に怒涛の日々だった。運営側であり、参加者であり、常に色々なことに目を配る必要があった。たった6人で12人のインド人を束ねることは難しく、18年も続く歴とした団体を担うために、常に全員にリーダーシップや責任が求められる緊張感があった。しかし、それでも毎日、信じられないほどの、充実感と楽しみを感じられた。気づけば、10日間という短い期間の中、インド人学生と少しでも一緒に過ごしたくて、オリンピックセンターに住み込むほどにまでなっていた。そこまで楽しみ、夢中になれた理由として気がついたことが2つある。

1つは、一概には言えないが、インドの学生たちは本当に純粋で素直な心を持っていること。何を見せても期待より100倍くらいの反応が返ってきて、疲れも今までの苦労も吹っ飛ばす程のやりがいを感じた。本当に愛すべき暖かい人たちだなと思った。

2つ目に、インド、日本と2つの国を対比しがちだが、その相違点よりもはるかに多くの共通点を見つけることができ、そのことに気がつけば、国や人種の違いは大した問題

ではないと言うこと。寝る前にガールズトークが盛り上がり寝られなかったり、嵐の夜に怖い話をしたり、テストでヘマをした体験談で笑いあったり…。本当に色々な感情を共有できた。10日間が終わる頃には、彼らと前からずっと親友だったような気持ちになった。

大学4年間で、私は幸いにも日本や海外で様々な国の人と触れ合う機会が多かった。将来やりたいことや目標もなかなか定まらず、色々なことに手を出してみた。しかし、4年目にして出会ったJISCでの活動は最も色濃く、達成感を感じた日々だった。もちろん、2年前に感じた、インドという国への特別な感情は間違っていなかったし、もっと知りたいと思うようになった。来年から私は社会人となって働くが、将来は何かインドと関わる仕事を目指すことができたという、希望を抱いている。JISCでの経験は、やりたいことへ向けて確かに一步前進できるきっかけとなった。

そして、最後になります…。本当に本当に色々な方にお世話になりました。JISCに入るきっかけを作ってくくださった、先輩や友人。いつも気にかけてくださり、最初から最後まで何度も様々な局面で助けて下さった長浜先生。VISA申請など、協力頂いたインドと日本の各先生方。

もちろん、一緒に試行錯誤して最高の会議を作り上げた同期のメンバー。全ての方に感謝をしてもしきれません。本当にありがとうございました。これからも、ずっと日本インド学生会議が続いていくよう願っておりますし、全力でお手伝いします。





《インド学生からのメッセージ》



When I had originally decided to go to Japan, I was honestly not sure of what to expect. It was certainly a completely new landscape, yet one that I somehow felt that I had an inherent connection with. Whether it was reading about Japan in books and ‘manga’, or watching famous Japanese movies and ‘anime’, there was clearly some form of inherent fascination that had subconsciously worked upon my intellect. Whereas my participation in the previous year’s conference had been limited to that of a co-member, it was nonetheless an eye-opening experience in every sense. To be given the opportunity to travel to the country and experience it first-hand was clearly one that I could not pass up.

It would perhaps not be remiss to say that being chosen as the President of the Kolkata delegation of the 18th Japan-India Students’ Conference 2014 was in equal parts a gift and a responsibility: While, on the one hand, it was truly a privilege to be picked out of the all the candidates for such an honorable position; at the same time, the weight of the history of this conference (18 years in making) and the greater history of India-Japan relations was keenly felt at every juncture of this journey. Even as I was raring with anticipation at the chance of exploring a completely new land and its society, my mind would remind me of the burden I had taken upon my shoulders, one that would impact me in more ways than it is possible to express through words.

As an individual, I had always been more interested in the apparent *differences* between people rather than their similarities, and similarly in this conference I wanted to interact with Japanese students to learn about their society, the way they thought and appreciated the world around them, and in turn to introduce them to our worldviews and societies. Yet this cultural dialogue was only possible because of the hospitality of our Japanese co-members. Whether it was the graciousness with

which the entire Japanese delegation hosted us and patiently attended to our every request, or the way in which they industriously prepared for every possible occurrence with remarkable efficiency, it was a wonderful feeling to witness firsthand the dedication they put behind every work they did, no matter how great or small.

In conclusion, all I would like to mention is that despite the table discussions and the sight-seeing and all our other activities, what I will ultimately always cherish will be the bonds of genuine friendship that have been created in the short span of this conference. Even as the trip came to an end and our feet were headed homewards again, a part of our hearts and minds will always remain in Japan, in the care of our newly made friends.



I have always wanted to go to Japan since I was 11-years-old. I was fascinated by Anime and Manga throughout my childhood which led me to take a really good decision, that was to get myself enrolled into Japanese. So when I got the opportunity to go to Tokyo for the 18th Indo-Japan Students' Conference, it was like a dream come true. I grabbed the opportunity without thinking twice.

When I landed in Haneda International, I first got a taste of what the Japanese mean by hospitality as they welcomed and greeted us like we were one of their own. I loved our trip to the countryside where we stayed together in a wooden lodge. We cooked and ate our meals together like one big happy family. It took me a little while to get used to Japanese food but now that I have returned to my country, I actually miss it. I still remember the taste of the Crepes in Harajuku, it was extremely delicious. Getting used to the Japanese bath system and sleeping in a Futon were memorable experiences. I still miss the streets of Harajuku and Akihabara where I felt like all that I had seen or read about when I was a child had come to life and was right before my eyes. For me, the visit to the High School and the interaction with the students was a lot of fun as it reminded me of my school which I had left behind recently. We were lucky enough to have been able to witness a traditional Japanese Tea Ceremony in the High School. I really enjoyed the Cultural Exchange when the Indian side dressed up in kimonos and the Japanese side wore sarees. I wish I could go back to the moments when I saw the Tokyo Skytree, the Bullet Train and the Sensoji in Asakusa. We discussed, debated and exchanged our views during the conferences which was the most important reason why we were there. I hope to inculcate within myself the values that the people there have taught me. We all had become attached with the Japanese students who took care of us so well for the past 13 days for which none of us got homesick even for a second. I hope I can improve my language skills further and I long to go back to Japan someday.



My experience in this year's JISC was awesome. I made many new friends, saw the many cultures of Japan, I saw the popular anime and manga culture of Japan that people always talk about and even saw the fashion in Japan I also tried Japanese food and loved it! This entire experience was very beautiful.

While coming to Japan I was a bit tense because I did not speak Japanese but after I came I saw that everyone in the Japanese team and the people we interacted with were so kind and understanding.

Among the many memorable experiences my favorite few are the stay at the log village in the country side where we/I had so much fun. We cooked together in the countryside, and we partied together also, and the visit to the car museum and the Tokyo skytree visit and the home stay, etc... I was really happy and enjoyed so much that I would like to come to Japan again if I ever get the chance and I would like to thank each and every one of the Japan members for making my Japan visit such a memorable experience that will stay with me forever!



I was enchanted with Japan from the moment I landed at the Haneda airport. The days following it only had me more and more excited to discover as much as possible in the short time we had.

Camping was an interesting experience, where we bonded with the members from both the countries and may have not gotten as close if it had not been for it. Cooking, fireworks, long walks and so much more was packed into a span of merely two days. Sight seeing at Harajuku and Akihabara were my favorites. I might not have gotten bored had I gone there every day. I must thank the Japanese members for taking us there so many times. The crêpes will never be forgotten!

The table discussions were a good opportunity to understand the thoughts, opinions and views of the Japanese members. The discussions at times got heated but that was only because everyone had a different opinion. Similarly, the school visit helped us gain an insight into the minds of Japanese school students. It was heartwarming to see that students, no matter from which country have the same hopes, dreams and worries. The kindergarten was a pleasure to be at. Playing and eating with the children really made me feel nostalgic and miss my own school days. The children were quite good at the games and definitely had more energy than us.

Japan was a series of firsts for me. From dying my hair blue with chalk, to eating 'butadon' at Akihabara, every moment was as enjoyable as the next. For someone who preferred eating only vegetables at home, I have now come to long for the day I eat 'butadon' again! Even the ofurō, which was initially slightly daunting, became the best part of the day.

I consider myself truly lucky to have participated in the 18th Japan India Students' Conference. Tokyo for me was a land of wonders and if Japan has been a dream for me since I was eight, then JISC was a dream come true. I cannot forget to thank Nagahama sensei, the Japanese members who took care of us from the day we landed and our own members who made this trip an unforgettable experience for me. I wish we could do this over. Thank you.



Japan is one of the developed countries of the world and I being a Geography student is my opportunity that I went to Japan. It was like a dream comes true. I was a part of the 18th Japan India Student's Conference for which I feel myself very lucky. In the opening ceremony held at Bunkyo Civic Centre the Indian & the Japanese members introduced themselves. I loved the video presented by the Japanese members and I hope everyone has liked our dance. We went to countryside and stayed at Yamada Ohashi in log village. The approaching typhoon made the experiences more exciting. We all cooked together which was again a great experience. The first conference held in the lodge itself. We stayed at NYC for our whole trip. Next we went to visit Kyoei High School which is in Kasukabe. On that morning we have another presentation. Then for the field work we went to NEET. That night we went to an Indian restaurant in Harajuku. Then we went to a kinder garden where we interacted with many of the kids who greeted us by saying Namaste. Then the next day we went to the oldest temple Asakusa, Tokyo sky tree and it ended with homestay. For me the home stay was quiet interesting because I met a Japanese pop star at NYC's parking slot while we were with Yukari san as that pop star's daughter was Yukari sans son Koga's friend. Then I went to a traditional Japanese festival on the way to her home. Then at night we slept on futon. For sightseeing we also went to Akhihabara and Harajuku. Then on the last day we completed all our table discussions. In the closing ceremony we realized that we can't stay in Japan anymore. It was the end of our trip. We taught the Japanese members some Indian greetings and they taught us Japanese greetings. Ofuro was a good experience for me and even I got addicted to it. After returning from Japan I am trying to maintain the things which I learnt there. The two countries have a long distance but there are similarities in culture. I'm in hope that one day I will again go to Japan..



EXPERIENCE OF THE JAPAN TRIP—

Visiting Japan was one of the best experiences of my life. I was one of the members from India in the Japan trip. We were received well by the Japanese members at the airport, from there on our trip started with fun and excitement. We went to countryside; the house was traditional Japanese style. We made our own food, where we could see an exchange of food culture among us. Then started the conference, the main purpose of us going there. Each and every group shared their presentation and thoughts about a particular topic. The whole conference went in a smooth and healthy way. We visited high school and kinder garten where we saw the future of Japan. We interacted with the students and took their views about various topics. We did many sightseeing went to Akihabara, car museum, Harajuku and many other places. The whole trip was full of fun and enjoyment filled. We made many friends there. They were many good and friendly. We shared many personal and professional feeling with them enjoyed everything about this trip with will always be in my heart forever.



The day finally came when we were supposed to leave for Japan and I was very excited. Japan is a country I wanted to visit since I was a child as I was always impressed by the rich cultural heritage of the country and especially the food. We reached Haneda airport on 4th October and were warmly greeted by the Japanese members. The next twelve days were the most memorable days in my life as I got to the chance to learn so much. The most important thing for me in this trip was the fieldwork, the high school visit and our visit to the kindergarten. The fieldwork gave me a chance to see how a huge company like Benesse operates and it gave me a chance to put up a good discussion with the company members. The high school visit and the kindergarten was very memorable as it gave me the opportunity to experience the life of the students in Japan and also to understand the methods of teaching. The main purpose of our visit which was the Conference was managed very well and the discussions were notable and helpful. We also got the opportunity to visit some of the famous places in Tokyo such as Asakusa, Akihabara, Harajuku and The Tokyo Sky Tree and finally we saw The Bullet train. I got the opportunity to walk through the compartments of the train and it was something which i would remember for the rest of my life. The opening and the closing ceremony was a grand success and the Japanese members had put up a great effort to make this conference a grand success. Our trip eventually came to an end and it was really tough to say a goodbye to the Japanese members as in the last twelve days we had become a part of a family. I would definitely love to visit Japan again in the future and I am looking forward to our next conference.



I deem it a great privilege to be a member of the 18th Japan India student conference. Those 10 days memories and experience in Tokyo (4th -14th October) is to be treasured and cherished for my life. I also learned a lot of this trip. Regarding my topic “Education” it was really good to exchange our views and know how Japanese education system differed from India. The kindergarten children were so cute and I turned as a kid when I played with them.it was really surprising to see high school kids cleaning their classrooms after their class hours. During our field trip to Benesse, we had a meeting with Japanese business men and we came to know about their good views in the Indian education system. Then the interesting part was culture exchange and home stay.my desire to take picture wearing a kimono dress came true and it was such a fun filled day. The site seeing was full of entertainment Japanese students greeted us really well with hospitality. I salute japan and JISC students for their punctuality and kindness. Thank you so much for making my trip a memorable one and I really miss you all badly! But I hope to see you all in India soon! Arigato gozaimashita!



Japan and India has always shared a special bond and special love for each other, and being a part of the 18th JISC has given both Indian and Japanese students the opportunity to share this special bond and love. I would first of all like to thank all my Japanese friends for making this happen. The 10 day trip has been amazing and very close to my heart, which I am going to cherish all my life. Being a part of this program has not only given me good memories but best friends for life. I still remember when the program started how shy we were to even talk to each other and ask anything that we wanted, but by the end of 10 days when we had to leave we had tears in our eyes and dint want to leave each other. All the Japanese members have been so humble, so kind and so helpful to me, that I don't know how I would replicate the same to you all. I am back in India now and it's almost been a month now and I still can't stop telling my friends and family about how sweet you all have been to me. All that I can do is only request you to give me an opportunity to show you how much you all mean to me. Each time I think of JISC I have a zillion memories that bring a small smile on my lips and a little tears of joy in my eyes and I say to myself "will I not get a chance to go back to Japan and re-live those 10 days?" Thank you all once again, Stay blessed!!



Senthilvel mandharachalam

When I was selected to be the part of 18th Jisc I was excited. I got more excited after the visit of our prime minister Modi to Japan. So I thought Japan is going to be good friend of India. So I started studying Japanese language.

Next to say about our stay in Tokyo was very excellent. Our Japanese friends Yurie, Sakina, Shoko, Hinako, Akira and Seita san took care of us and we never felt that we are in foreign country. It was like staying in our own country. Next the important thing is conference. The conference sometime became more controversial and there was very serious discussions. Our group topic was Natural environment. Along with Shoko san and Seita san we visited the science museum where we studied a lot about Japanese natural disasters and many other things about environment.

We went for a camping in country side which was best part of our conference. Indians side prepared our dishes and Japanese side prepared their dishes and we exchanged. We had a lot of fun and experience during the country side camp.

Next I want to mention about our visit to high school. We presented and discussed with students of high school. The school students are really highly talented at their young age.

We also visited the kindergarten and played with children there. It was like remembering our childhood days.

I wanted to thank Nagahama sensei, and our Japanese friends especially Yurie san, Shoko san, Sakina san, Hinako san, Seita san and Akira san for making this trip unforgettable. We learnt many things such as cleanliness, punctuality and hospitality from Japan which was lesson for our life.

Even Modi started "SWACCH BHARAT" clean India campaign on seeing the cleanliness of Japan. After I returned to India I am taking part in this clean India program on seeing Japan. Again I wish to thank Japan and our Japanese friends...

With regards.



I visited Japan during October, 2014 for the 18TH JAPAN INDIA STUDENT CONFERENCE. I stayed in Tokyo for 10 days and it is truly the most memorable experiences of my life. We were warmly welcomed by Yurie Yusufuku and Akira san. Then we were taken to our lodge from where I met the president Hinako Machida. One thing I noticed about these Japanese people was their warmth in nature. They respect and treat people so well which as an Indian I wish to learn from them. The next day was the orientation and I met 2 other members, Sakina Inoue and Shoko Ubara. I heard Sakina telling she did not sleep the whole night. Then I understood how seriously Japanese people work and their sincerity towards their commitment. Japanese people taught me so many things the entire 10days. Their kindness and active involvement towards their work impressed me a lot. Their humble nature and respect for people is something I wish to learn from them. Such highly disciplined people are always successful in their efforts. I learnt a lot about their life style and culture. They patiently cleared all our doubts. I troubled them by getting lost in the train one day. I feel sorry for troubling Suzuki san especially on that day. They took us to different places like Shinjuku, Harajuku, Shibuya, Sky tree tower, country side, high school, Indian embassy, shopping etc. They helped and guided us so kindly throughout. In the country side we stayed for 2 days. They took best care of us by cooking for us. I was amazed to see the Japanese life style wherein they use 3 dustbins, eat dinner before 7pm, students cleaning their class room, people waiting in queue patiently everywhere. These are the things which I do not see in India. I really want to make my country as clean as Japan. I was admiring the way shop keepers treated their customers. I was surprised to see that there is no theft in Japan. It's the safest country that I know of. Once I missed my belonging in station but it was not stolen by anybody. It was safely in the same place where I left. On the final day they made lot gifts and presents for us which we thoroughly cherish always. I really wish to do my further studies in Japan and take back all the values to my country. The bond that we share with Japanese girls is truly genuine and I am waiting to see them all in India soon so that I can show my gratitude towards them. Thanks to the founder of JISC and all the members of this year for making the trip very memorable for us.



<第五部>

おわりに

《謝辞》

第18期日本インド学生会議の活動において、私たちは非常に多くの方々にご支援、ご協力を賜り、様々な面で助けていただきました。学生会議と申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点多々あります。そのようなとき、皆様からの助言が、私たちをより実りある方向へと導いてくださいました。

下記の方々をはじめとする、多くの方々にご尽力いただき、第18回目となる日本インド学生会議を無事に開催できましたことを、この場を借りて実行委員一同心より御礼申し上げます。今後、第18期実行委員は、任務を全うした後もOBOGとして日本インド学生会議をサポートし、より良い学生会議づくりに励む所存でございます。これからもより一層のご指導いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

2014年12月

第18期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

助成： 公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱UFJ国際財団

後援： 外務省
在日インド大使館
独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 日印協会
公益社団法人 在日インド商工協会
ディスカバー インディア クラブ(DIC)

協力： コルカタ 日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyokai)
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI
国内 学生会議連絡協議会 (SCN)
日本インド学生会議 OBOG 会
春日部共栄中学高等学校
ベネッセコーポレーション
八柱幼稚園
アマチャの会
インド通信

個人： 北爪裕子 様
滝澤晋司 様
近藤正規 先生
長浜浩子 先生
鈴木佑輔 様
滝澤由加里 様
糸井友也 様
岸野綾菜 様
林和沙 様
小山田里奈 様
三輪達哉 様
町田日天子 様

個人協賛：松岡環 様
長谷川時夫 様
金井武 様
勝田友治 様
櫻井秀武 様
佐野一矢 様
鈴木佑輔 様
佐波優紀 様
岡部知美 様

《規約》

日本インド学生会議規約

前 文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。

日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章 総則

第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。

また、省略名称として「JISC(ジスク)」を使用する。

各代実行委員会に対しては「第○期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第○期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「○○年東京(カルカッタ)大会」などの名称も使用する。(○は英数字とする。)

第二条 活動

(一)本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催
2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催
3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成
4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催
5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動

(二)本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。

(三)本団体公式マークを以下のようにする。



第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議 規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。

- 「日本インド学生会議 実行委員会規定」
- 「日本インド学生会議 OB・OG 会会則」
- 「日本インド学生会議 会費規定」
- 「日本インド学生会議 創設趣意書」
- 「日本インド学生会議 基本理念」
- 「日本インド学生会議 各代実行委員会趣意書」
- 「日本インド学生会議 長期計画案」

第二章 構成員および組織

第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者(石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏)の3名である。

第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

第十条 OB・OG 会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG 会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。

一、 役員の選出および罷免二、 役員の退会

三、 予算および決算四、 顧問の委託五、 規約の改正

六、 その他必要と思われる事項 また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上(但し OB・OG の議決権が有効な事項に関しては、OB・OG 会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める)の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。

主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OG の議決権>
役員の選出および罷免	○	
役員の退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG 会に関する事項	○	○

第十二条 任期および会計年度

(一)任期および会計年度

実行委員会は、来期の本会議の六ヶ月前に改組し、その後一年間を任期および会計年度とする。

(二)業務の延長

前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。

(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第十四条 個人情報管理の努力規定

各構成員は、本団体の活動に際して知り得た個人情報(個人に関する情報であつて、個人が識別可能なものをいう。)について、みだりに団体外部および他の構成員に漏洩することのないように努めなければならない。

第三章 処分

第十五条 処分

(一) 長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(二) 総会は、長期に渡り実行委員としての義務を果たさない者、または前文に掲げた主旨及び目的に著しく背く言動・行動その他日本インド学生会議の運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員に対して、規定の有無にかかわらず、3分の2以上の賛成で、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(三) 前項の処分についての発議しようとする構成員は、まず OB・OG 会事務局および、各期代表世話人に事実の調査の申立をしなければならない。

(四) 前項の申立を受けた OB・OG 会事務局および各期代表世話人は、申立人、被申立人(処分の対象として申立をされた者。以下同じ。)および他の構成員に対し、意見の聴取を含む事実の調査をおこなう。

(五) 総会は、処分についての議決を、OB・OG 会事務局および各期代表世話人の調査にのみ基づいてする。申立人、被申立人、その他関係人・OB・OG 会事務局および各期代表世話人が認めた者は、第 11 条の規定にかかわらず、議決権を有しない。

第四章 附則

第十六条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十七条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。

第一回改正 平成 11 年 1 月 第二回改正 平成 12 年 4 月 第三回改正 平成 16 年

《編集後記》

この報告書の完成とともに、今期の活動も一区切りつくと思うと、なんだか突然寂しくなりますが、同時に達成感と安堵の気持ちでいっぱいです。

怒涛の10日間がこの報告書に凝縮されています。作成にあたって、日本側実行委員はもちろん、インド側メンバーからの視点やフィードバックもなるべく多く加えたつもりです。18名の参加者一人一人が心を込めて綴った記事を通して、18期の本会議をリアルにお伝えすることができれば幸いです。

私たちの活動は、より良い日印関係の発展に貢献するにはほんの微力に過ぎないかもしれませんが、しかし微力ではあってもこの活動の積み重ねが、きっと今後大きな成果を生み出せると強く信じています。我々18期メンバーも、これで終わりではありません。この貴重な経験を、各々の人生、そして日印の更なる友好と発展に最大限生かせるよう努めていきたいと思います。

最後に、18期の活動を支えてくださった皆様、改めて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。皆様のますますのご活躍をお祈りするとともに、日本インド学生会議の今後の更なる繁栄を願っております。

2014年12月1日

第18期日本インド学生会議 広報局長 井上咲菜

第18期日本インド学生会議報告書

編集
発行

印刷・製本

2014年12月発行
広報局長 井上咲菜
第18期日本インド学生会議実行委員会
代表 町田日奈子
株式会社 エイト通商